
僕と彼氏と兄二人

瀬見尾津凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼氏と兄二人

【NZコード】

N7805M

【作者名】

瀬見尾津凪

【あらすじ】

極度のブラコンである双子の兄が原因で、僕は彼女にふられてしまう。

いい加減兄たちに『弟離れ』してもらいたいと仲間たちに相談したら、「彼氏が出来た」と告白する作戦に。話を聞いた知人がその彼氏役を買って出たが、知人は僕のことが本気で好きだった！
周囲の友人に振り回されながら、新たな世界へと走り出す僕の物語。

彼氏が、出来た

「『めんなさい、あたし……もつ、耐えられない』
たたたつ、と駆けて行く彼女。

「ちょっと待って！」

思わず追いかけようとしたが、僕はすぐに諦めて呆然とその背中を見送る。

三ヶ月付き合つて、今度こそつままれるはずだった。

「あー、兄さんたちのせいだ」

したくもないのに溜め息が出る。僕の兄たちがいかに迷惑な人か、彼女も理解してくれていたはずなのに。

僕は顔を上げると、仕方なく帰路へ着いた。

「ただいま」

家へ帰ると、夜兄の声が返つて来る。

「おかえりー。夕飯は？」

靴を脱いで「食べてきた」と、中へ入る。

「さきちゃん」とデートだったんでしょ？「どうだつた？」
と、居間でくつろぎながら僕へ問う月夜^{つきや}、通称夜兄。

「……フラン」

まるで母親みたいだと思いながら、僕はそれだけ言つと椅子へ腰を下ろした。何だか、悪夢を見ているようだ。

「え、マジで？ どうしたの？」喧嘩したの？

夜兄が僕の顔をじっと見たが、僕は構わずに言つ。

「別にどうつてことないよ」

まさか、兄さんたちが会つ度に色々な事をしつこく尋ねるからだなんて言えない。言ったところで、彼らは僕の為だと言つて聞かないだろう。

「……そつか。まあ、そう落ち込まないで

と、にこりと笑う。ああ、マジで「さい」。

僕が心の中で悶々としていると、朝兄がお風呂から上がってきた。

「おかえり、デートどうだつた？」

タオルで頭をぐしゃぐしゃしながら、僕の向かいへ座る朝日、通称朝兄。

「駄目だよ、朝日。まなど愛斗、振られちゃつたんだから」と、夜兄が言うと、朝兄は目を丸くした。

「マジかよ？ 何でだ、何があつたんだ？」

「……別に」

とりあえず落ち込んでるふりをして、部屋へ行こうと思った。けれども同じ顔をした兄二人は僕を憐みの目で見つめる。

「そうか、きっと次があるぞ。そう落ち込むなって」「明日は愛斗の好きな焼き肉にしようか」

僕は適当に頷くと、すぐに自分の部屋へ向かつた。

両親から離れて気付いたことは、兄たちの方が何十倍も過保護だということだった。母も過保護ではあるが、週に一度メールか電話すれば安心してくれるし、父はあまり意見しないから気が楽だ。それよりも夜兄の方が母親らしいし、朝兄の方が父親らしい。もちろん、良い意味ではなく、だ。

部屋へ入り、ぱちっと電気を付ける。フローリングの冷たさを足の裏に感じながら、ベッドへ倒れ込む。

「あー……」

疲れた。兄たちが原因で彼女と別れたのは、これで何度目になるだろう？

コンビニのバイトをしながら、一週に一度の割合でライブハウスのステージへ立つ。仲間たちとのスタジオ練習は週に一度、ライブが近いと週に二、三日はある。

しかし、はつきり言って僕はほとんど兄一人に養われている状態だった。光熱費は兄一人が半分ずつ出しており、僕が唯一払うのは

家賃の一割程度。稼ぎが少しでも減ると、兄たちが「払わなくていい」と、つるさい。

「僕だって、もう大人なのに」

ライブハウスの楽屋で思わず溜め息をついた。

「お前の兄貴、また来てんの？」

と、ギタリストの友一が聞いてくる。

「うん、来てる……」

今回はトリを務めるだけに、兄一人の興奮も増しているはずだ。「（こ）」、一階席あるんだから、関係者で来ればいいのにな

と、ベーシストの浩美^{ひろみ}も言う。

「うん、僕もそう言つたんだけどわあ……」

はあ、と思わず溜め息が出た。これから出番なのに、これでは良くない。だが、やっぱり僕はこの前のことを根に持っているわけで。「大変だねえ、相変わらず。でもお兄さんたち来ると、すげい盛り上がるよね」

と、ヴォーカルの清男、通称キオが面白そうに笑う。

ステージの方から、他のバンドの演奏が響いてくる。披露するのは四曲のはずだから、これが終わったら僕たちの番だ。

「僕だってそろそろ限界だよ。彼女にはまた振られるし」

すると友一まで笑いだした。

「何だよ、また振られたんか！ 可哀そうやなあ、愛斗は」

自称大阪生まれのエセ関西弁にムツと来る。

「僕は困ってるの。いい加減弟離れしてくれないと、結婚すら出来ないよ」

「そうだなあ、彼女に紹介するとすぐに振られるんだもんな」

と、浩美。少しばかり面白目に考えてくれてるらしいが、あまり期待はしないでおこう。

「いつのこと、彼氏ができたっていつのは？」

「はー？」

浩美の突拍子のない提案に、僕は大きな声を上げてしまう。やは

り期待しなくて良かつた。

「ちょっと待つて、何でそこで彼氏なの？」

すると、友一が便乗した。

「良いなあ、それ！ 弟に彼氏なんていたら、びっくりするで！」

「いやいやいや」

「本気なんですーって言つたら、自然と離れて行きそうだねえ」と、キオまで。

「じゃ、じゃあ、誰が彼氏になつてくれるのさ？」

「俺で良ければ協力するで」

一番に名乗りを上げる友一だったが、浩美がそれを却下した。

「駄目だ。仲間内で彼氏なんて、都合良すぎるだろ」

いつの間にか音が変わつて、演奏が終わりに近づいていた。彼らが戻ってきて、スタッフが準備を整えた後僕たちはステージの上だ。「そうかあ？ 意外と、実は出逢つた時から運命感じてましたーみたいな？」

「ないでしょ。面白がつてやると、逆に愛斗が可哀そうだよ」

キオに窘められて、友一が口を閉じた。僕は呆れてまた溜め息し、気分転換に樂屋内をうろうろ歩く。

「どうせなら、他のバンドの奴らか、兄貴たちの知らない友人にしたらどうだ？」

「でも、そんなことに協力してくれる人なんていないよ」

鏡で衣装を確認する。白いTシャツに黒のベスト、灰色のジーンズ。

「そうだよな。彼氏つてことは、作戦がばれた後も、その気を疑われるだろしぃなあ」

「むしろ彼氏にやるくらーなら、俺たちが！ つて、ならへんかな？」

「だから友一、それこそ禁断の愛だよ」

靴だつてちゃんと履いたし、ステイックの用意も出来てる。

「何が禁断の愛だつて？」

と、声をかけたのは、いつの間にか戻つてきていた他のバンドのギタリストだった。

「おう、お疲れさん。愛斗がな、兄貴たちに離れてほしくて困つてるんや」「んや

「で、彼氏ができたつて告白するのはどうかとこいつ話をだな」

友一と浩美の説明を受けて、彼が僕を見る。

「飽くまでも作戦だけだ。ジユン、お前協力するか？」

と、浩美に呼ばれた純は、僕の身体をじっくり見ると笑つた。
「期間はどれくらい？」

「決めてないが、まあ、三ヶ月もあれば十分だな」「うひひ

「ちょっと浩美、勝手に決めないでよ」

と、僕は言う。けれども、純は僕の肩へ手を置いて言つた。

「どうせ兄貴たち、またこっち来るだろ？ 良いじゃん、やつてやるよ」

「ええ？ ちよ、本気なの？」

ここにこいつ笑う純。周囲を見回すと、話を聞いていた一同がにやりとする。

「いや、あのー……」

「ほら愛斗、行くよ」

と、キオが僕にステイックを渡し、納得の行かないまま楽屋を出た。

「あ、あの、その……彼氏が、出来たんだ」「

朝兄と夜兄が、同じ顔で同じように呆然とする。

「ジユエルビー・トルでギターやってる、高野純って言います」

僕の氣も知らずに愛想笑いを浮かべる純。

「えつと、今まで黙つてて、ごめんなさい」

仲間たちに提案してもらつた言葉を紡ぐ僕。本物の人は、兄弟や家族にカミングアウトするのに、とても勇気がいるらしい。

「その、本当は僕

「

「そうか、良かったな。おめでとう、『愛斗』

「彼女と長続きしないのは、そういうことだったんだね

「え?」

どこかすつきついた様子の兄たち、「僕は思わず困惑った。な、何だこれ……すごく複雑な気分だぞ。

「純くん、弟をよろしくな

「ちゃんと幸せにしてあげてね

横目に見た純も少し戸惑つた様子で返す。

「あ、はい」

何だらう、とってもややこしくなってきた気がする。

帰宅した後も、兄たちの僕に対する態度は変わらなかつた。どう見たつて僕は普通の人間なのに、彼らは僕をそういう人間だと受け止めてしまつたようだ。

「純くんとは、何で付き合つことになつたの?」

「えつと、前から何回か対バンさせてもらつてて、何ていうか、その……自然に?」

これが作戦だとばらしたら、兄たちはやはり安心するのだろうか?

「どうか。告白はどちらからだ?」

「えつと……純の、方から」

今まであまり名前を呼んだこともないような間柄だつた為、改めてその名を言つうと違和感を覚える。

「なるほど。前から思つてたが、愛斗って可愛い系が好きだよな」「え?」

今の相手は男なのに可愛い系とは、どういうことだ。

「うん、俺もそう思つてた。純くんつていわゆる可愛い系イケメンだし」

「……あ、うん、そ、そつかもね」

ばらすタイミングを密かに計つていたのだが、ばらしこくくなつてきた。

今日はやめて、明日以降にじょつか。あ、でも三カ月とか浩美が
言つたな……「ふ、明日にせ絶対に言ね。じゃないと僕が変に
なる。」

きっかけは兄さん

しかしその畠田も、兄たちにはいつもと変わらず僕に接してきた。

「バイト何時から？」

「え、十時だけど」

「何だよ、彼氏からモーニングコールでもきたか？」

「え？」

社会人の兄たちに本当のことをおつとめて早起きしたのに、何か違うぞ。

「いや、別に……」

「と、僕もなんだかんだで臆病だつたりする。違う、違うんだ！
「じゃなくて、あの、言いたいことがあるんだ」

ネクタイを締める朝兄と、のんびり朝食をとる夜兄が僕を見た。

「あの、昨日のあれは……その、本気じやなくて」

「どうこうことだ？」

「本気じやないって？」

「あ、あの……だから、彼とは、その

何て言えばいいのだろう？ 兄たちを驚かせたくてやりました？

「本当は付き合つてない、っていうか……」

「口をもじもじさせる僕を見て、何を思ったのか夜兄が言う。

「まだ発展途上ってこと？」

「ああ、そうか。そうだよな、初めての彼氏だもんな」と、朝兄が笑いながら鞄を手に取る。

「行つて来ます」

そして玄関へ向かい、すぐ回家を出てしまつ。

「いつてらつしゃーい

と、夜兄。そういうことじやないんだと弁解したくても、もうしゃ

る気が失せていた。まだ、朝なのに 。

バイトを終えて帰路についていると、携帯電話が鳴った。

「はい、もしもし?」

『あ、愛斗? どうだつた、兄貴たち』

純だつた。

「うん、それなんだけど……完全に受け入れられてるよ
機会越しに笑い声が聞こえる。

「笑い事じやないよ」

『あはは、『じめん』『じめん』』

全く困つた彼氏である。

「で、何の用?」

『いや、ただそれだけ』

『じゃあ切るよ?』

『ちょっと待つて。でもさ、愛斗』

「何?」

『まだ三ヶ月あるんだし、その内に嫌気がさして離れるかもしれないぜ?』

「……それなら良いけど」

『オレは別に、嫌じやないし』

ちょっとと真面目な口調だつた。友一みたいに面白がつているのか
と思つて僕は言つ。

『僕は嫌だけね』

というか、受け入れられたこと自体が不満だ。僕は女の子が好き
なのに。

『はは、そう言つなよ。気長にやつて行くぜ』

と、純はまた笑う。もつ本当に、訳が分からぬ。

小学校で教師をしている夜兄は、だいたい七時には帰宅している。

「おかえりー、愛斗」

「ただいま」

廊下を挟んでいつものやり取りをすれば、台所から良い匂いがしてくる。

「ああ、カレーか」

朝兄と違つて料理の上手い夜兄だが、たまにこいつして手抜きをする。まあ、別に構わないんだけど。

自室の扉を開けて中へ鞄を放り投げる。それから台所へ行つて冷蔵庫を開けた。

「ねえ、愛斗」

「何?」

ペットボトルのお茶を取り出し、もう片方の手で棚からグラスを取る。

「昔からやうだつたの?」

「え?」

振り向くと、兄さんはこちらを見ていなかつた。

「男の子が好きだつたんだ?」

「え、ああ、まあ……」

曖昧な返答を返したつもりだが、肯定してしまつたのでは、と、僕は慌てた。

「あ、でも夜兄。その、今まで付き合つてきた彼女のことは、本気だつたんだよ」

それでも兄さんはこちらを見なかつた。やはり、ショックを受けていたのだろうか。

「そうだよね……愛斗、良い子だもんね」

僕は口を閉じると、テーブルへ置いたグラスにお茶を注ぎ入れる。溜め息まじりに一口飲んで、夜兄の様子を窺う。

「……昔、小さい頃は、本当に女の子みたいで可愛かつたよね」と、夜兄が唐突に言つた。

「…………そうだね」

実家のアルバムには、頭にヘアピンを付けられた幼い僕がいる。

そのそばにはいつだつて、朝兄と夜兄がいた。

「ずっと気付かなくて、『ごめんね』

そう言つた兄さんの姿に、胸が痛む。僕は、ひどい嘘をついてしまつたらしい。

「夜兄、『ごめん。本当は、その……』

伝えなきやいけないことがある。僕が少し大きく息を吸つた時、玄関が開いた。

「ただいまー」

朝兄だつた。夜兄がすぐに「おかえりー」と、返す。何でまたタイミングの悪い……。

「今日はカレーか。ちょうど食べたいと思つたんだ」と、入つて来るなり言つ朝兄。

「でしょ？ 僕もそう思つてさ」

先ほどまでの空氣が無かつたようだ、夜兄はにこつとする。

双子である兄さんたちは、きっと僕に対する考え方も同じなのだろう。それはつまり、僕の感じる罪悪感も二倍なわけで。

朝兄がスーツのポケットから携帯電話を取り出し、テーブルへ置く。それからスーツを脱いで、ネクタイを解いた。

「あ

ふと見たら、朝兄の携帯電話のライトが点滅していた。すぐに兄さんもそれに気が付いて、取り上げる。

「お、母さんから電話來てた」

と、ボタンを押して耳へ当てる朝兄。

僕はその様子をぼーっと眺めていたが、はつと気が付いた。僕に彼氏ができた、と、報告されたら大変だ！

「あの、兄さん、あの、あの、「

「ん？」

「か、母さんと父さんは、まだ彼氏のことは内緒に朝兄が頷いた直後、母さんが通話に出たよつだ。

「母さん、何の用だよ？」

と、機会越しに兄さんが会話を始めた。それを見て、思わず溜め息をつく僕。

「こんなことになるのなら、彼氏ができたなんて言わなきゃ良かつた。」

しかし、一人に本当のことと言えないまま三日が過ぎた。言おうと思つてはいるのだが、どうも一人の優しさに負けてしまつ。スタジオで個人練習をしてくる時も、僕は憂鬱だった。力任せにドラムを叩いても、納得のいく演奏にはならない。

「くわづ

と、ステイックを振り下ろすと、勢いのあまり一つに折れた。

「……」

他にもステイックは持つてはいるから良いけれど、この苛立ちはどうしたものか。

「あーあ

でも、僕が音楽を始めたきっかけも兄さんたちだつたな。

一人が中学一年になつた時、ギターを習いたいと言いだしたんだつけ。それで、近くの音楽教室へ体験入学に行つた時、その隣でドラムの教室が開かれていた。一人がギターを習つている時に、僕は母さんへドラムをやりたいと駄々をこねたのだ。

今では良い思い出だが、それと同時に何故、あの時僕はドラムをやりたいと思ったのか、不思議でならない。音楽なんてさほど興味がなかつたし、ドラムがどういった楽器であるかもよく知らなかつたはずなのに。

「……よし

それでも僕は、じうしてドラムを続けている。プロのドラマーニなるのを見ている。

折れたステイックを拾い上げ、僕はまた練習を始めた。

本当のこと

あつとこつ間に一週間が過ぎると、僕はだんだん家に歸づらくなってきた。当たり前である、本当のことを未だに言えずここにいるのだから。

夕食を終えた時だった。朝兄と一緒にぼーっとテレビを見ていると、僕の携帯電話が鳴った。

「誰か？」

と、尋ねる朝兄。僕は画面を見て、答えは返さずに通話に出る。

「もしもしし？」

『よつ、愛斗。今、ヒマ？』

純だつた。朝兄に語られないよう、すべさま自室へ向かう。

「う、うん、暇だけど」

『それは良かった。あのさ、明日会える？』

「は？」

閉めた扉の向こうで、風呂から上がってきた夜兄が朝兄と何か会話するのが聞こえた。

『ライブのチケットが余つちやつてさ。愛斗、行かねえ？』

『えつと、行つても良いけど……』

『ああ、チケット代なら奢るよ。急な事だしな』

『あ、あの、そういう訳なくして』

『ん？』

『そ、それは、純と一人でつてこと？』

そう尋ねると、純が機会越しにこり笑つた気がした。

『もちろん。じゃあ、六時に渋谷な』

と、通話を切る純。兄さんたちになんて言えぱいのか、僕は溜め息をついた。

結局、兄さんたちには嘘をつけなかつた。純と一緒にライブに行く
く、たつたそれだけのことでも兄たちは僕を応援してくれた。

「……ねえ、純

「何?」

開演前のざわめきの中、僕は彼へ言つ。

「僕、兄さんたちに本当のことを言おうと思つんだ

「は?」

と、目を丸くする純。

「せっかく協力してくれて悪いんだけど、もう終わりにしてよう」「あいさつ

横目に見た純は口をポカンと開けていた。

「本当にごめん」

と、溜め息をつく僕。

やがて純は「ああ、そうだよな」と、頷いた。

ライブは僕たちよりも名の知れたインディーズバンドのものだつた。どちらかというと好きなバンドだったこともあって、僕は久しぶりに心からライブを楽しんだ。

職業病とでも言つのか、無意識に僕はドラムに注意して耳をませたり、その動きを目で追つていた。こうして他人のライブを見る
と、自分自身の成長に繋がるので、学ぶべきところは素直に学ぼう
と思った。

ライブが終わると街はすっかり夜になつていた。繁華街のライト
が騒々しくする道を、純と一人で歩く。

「なあ、愛斗」

「何?」

純は俯いていた。

「オレ、お前に謝らなきゃいけないことがあるんだ」
僕は何も言わずに続きを待つ。

「……オレ、すげー良いチャンスだつたんだ」

「何が？」

顔を上げようともせず、純は言つ。

「ずっとオレ、愛斗と付き合いたいと思つてた」

見上げた空に星は無くて、僕は言葉が右から左へ抜けた頃にはつとする。

「え？」

「だからオレ、お前のこと」「

と、純が立ち止まる。

「好きなんだよ」

泣き出しそうな目で僕を真っ直ぐに見つめる。

「……え、えつと、何言つてるの、純」

意味が分からなかつた。理解が出来ない展開は、先を読むこともできない。

「お前の彼氏になつて、オレに惚れさせるつもりだつた」

惚れるも、何も……やはり理解が出来なかつた。そういう種類の人間がいることは分かつていていたつもりだが、まさかこんな身近にいたなんて。

「お前が嫌なら別れよう。でもオレは、もっとお前のことが知りたい」

頭がぐるぐると回りだす。頭痛というか、眩暈というか、目の前の現実が現実味を帯びないような、とてもちぐはぐな感じだつた。

「だから愛斗、オレと付き合つて」

「あ……いや、え？」

おかしいな。純が僕を見る目が以前と違つた。いや、もしかすると彼はずつとこんな目で僕を見てきたのかもしない。いやいや、今はそんなことよりも、目と鼻の先にいる彼をどうにかしないと。

……目と鼻の先？

はつとすると、純が僕に顔を近づけていた。自然と僕の視線は彼の唇を見てしまつ。

徐々に距離を詰める純……あと数センチのところまで、僕は逃げ出

した。

帰宅してすぐこ、僕はベッドへ入った。

冷めた頭で数時間前のことを考える。純は前から僕のことが好きで、彼氏になつて惚れさせるつもりだった？

そんなのありえない。

「愛斗？」

朝兄の声が僕を呼んで、臥室の扉が開く。

「何かあつたの？」

と、優しい夜兄の声。

僕は布団をかぶると言った。

「何でもない」

今更全部を話すのは面倒だった。当事者の僕でさえもこういふことを、兄たちが分かってくれるとも思えない。

「なあ、愛斗。母さんと父さんと言つ時は、ちゃんと俺らがついてやるから」

「同性愛は難しこよね。でも、悩んでないで打ち明けてくれないと、何も出来ないよ」

握りしめた手に力を込める。ごめんなさい、朝兄、夜兄。

友達以上恋人未満

「それで？ あいつ置いて逃げたわけ？」

「……うん」

スタジオでの練習に入る前、僕は近くの喫茶店で浩美と会っていた。

浩美はどうやら純の性指向を知つていたらしく、特に困惑する様子もない。

「そうか、災難だつたな」

と、浩美はおかしそうに笑う。

「笑うことじやないよ、僕は本当に困ってるんだから」

次に会つた時、どんな顔をすればいいのか分からぬ。むしろ、会いたくない。

「そうだよなあ……やつぱり嫌なのか？」

「うん、もちろん」

「じゃあキスしどきや良かつたのに」

「何でだよ！」

真面目な顔で言つ浩美を見て、僕は相談する相手を間違えたかと思つた。しかし、純と一一番仲が良むそつに見えるのは浩美だつたし、元はといえば浩美の発言が原因だ。

「別にいいじゃん、キスぐらい。減るもんでもなし」

「……浩美、もうちょっと真面目に考えてよ」

僕がそう言つと、浩美は急に真剣な表情になつて言つた。

「じゃあさ、愛斗。俺もお前が好きだつて言つたら、どうするの？」
「は？」

じつと僕を見る浩美。僕は、開いた口が塞がらなかつた。

「な、え、何なの？」

「だから、例えばだつて
と、浩美はすぐに笑う。

「冗談だつたよつで安心するが、純と仲がいいのだから、その可能性は拭えない。一応、これでももう三年近く付き合つてゐるのだが、浩美はどうも考への読めない奴だつた。

「うーん……断る

「何で？」

「何でつて、それは、好きじゃないし、男だし……？」

浩美が満足そうに頷く。

「だろ？ 純にもそう言えばいい」

「……そうだね」

きつぱり断るしかないのだ。だつて僕は、男を恋愛の対象にはできない。

「分かつたなら、次会つた時、絶対に言つんだぞ」

「うん」

「じゃないと、あいつに襲われるぜ」

と、浩美は笑う。……でも、それって純を傷つけることになる。そういうのは、あまり好きじゃない。だからと言つて、彼の想いに応えるのも違う、かな？

「……ありがとうございます、浩美。僕、ちゃんと純と話し合つてみるよ」

そうしろ、と浩美は言つてくれたが、すぐに僕の異変に気が付く。「え、話し合つて何を？」

「いろいろ」

そう返して僕は先に席を立つた。

僕らが歌つるのは軽快なリズムのパンクロック。キオの書く詩の雰囲気を壊さないよう、浩美が中心となつて曲を作りあげる。それから僕らはそれぞれの楽器をどのように演奏するか、考える。この前のライブで見た音を思い出し、僕はリズムを刻む。

「愛斗は優しい奴だからな、迷惑なんぢやないかって思つてるんだろ？」

「昔から変わらないよね、身体は大きくなつても中身はある頃のま
まだ」

久しぶりに三人が揃つた休みの日、何故か僕は兄さんたちに説教
されていた。

「俺たちはいつでもお前の味方だ。だから素直に頼つてくれればい
い」

「愛斗が外で何しようと、大事な弟であることに変わりはないんだ
よ」

僕は何て言葉を返せばいいか分からなかつた。

「すばり聞くぞ、愛斗」

「うん、言つてやつて」

朝兄が深呼吸をしてから言つ。

「純とは、どうなつてるんだ？ 本当に付き合つてるのか？」

予想通りの質問だつた。最近の兄たちは、僕を以前よりも心配し
過ぎていると思つ。

「……えつと」

田を逸らして考える。言つべきだらうか、素直に。

「……告白、されたんだ」

「それで？」

と、夜兄が促す。

「その……僕は、まだ、迷つてて」

朝兄と夜兄が納得したように頷く。

「で、でも、その……」

僕が本当のこと伝えようとした時、朝兄が口を開いた。

「お前はどうなんだ？ 好きなのか？」

「え、えつと……嫌いでは、ないんだけど」

「じゃあ、愛斗も彼を好いている？」

僕は頭を抱えた。

友人としては悪くないのだけれど、その微妙なニュアンスをどう
伝えたら良いだろう？ 恋人にするほどではない？ 違う、友達以

上恋人未満？

「その、純とは元々そんなに親しくなかつたから、戸惑つてゐるんだ。

恋とか、彼氏とか、よく分からなくて」

僕がそう言うと、一人はどこか安心したように微笑んだ。

「そうか。なら、とことん悩めばいい」

「いつか、納得のいく答えが見つかるよ」

「……う、うん」

また言いそびれた。彼を紹介した時は、兄さんたちを騙すつもりでいたのだと。

四人でライブハウスへ向かう途中、僕は比較的まともなキオへ尋ねた。

「友達以上恋人未満って、どういう感じなのかな？」

「え、兄弟みたいな感じじゃない？」

と、即答するキオ。僕としてはもう少し悩んで欲しかつたのだが、キオにとつては大したことじやないらしい。

「兄弟、ねえ」

赤信号で立ち止まり、日が伸びてきたことを実感する。そういうば、もう七月も半ばだ。

「キスとかセックスをするのは嫌だけど、友達には言えないことを知つてゐる、的な？」

「……キオは、そういう人いるの？」

「んー、昔ねえ」

赤が青へと切り替わる。僕らはまた歩き始めて、僕はふと思つた事を口にしてみる。

「兄弟なら、良いのかもしけないなあ」

すると、キオが僕を見て言う。

「あ、でも、友達以上恋人未満って、だいたい異性だよね」

純をそれに当てはめようとしていた僕は、もうそっち側の人間になりかけているのだろうか？

苦笑しながら、僕はキオへ言つ。

「うん、そうだね」

どちらにしても、純を恋人以上にすることは、きっと僕には出来ない。したくない、のが本心か。

ライブハウスの楽屋は大部屋だが、そんなに広くない。

なので自分たちの出番近くにならないと、中へは入れない。つまり、僕が純と接触するには出番が隣り合つていなければならぬのだが……タイムテーブルは見事に空氣を読んでいた。

今回もまた、僕らがトリを務めて、その前に純たちのバンドがステージへ上がる。ほぼ入れ替わりに楽屋へ入るわけだ。

せめて、何か一言で良いから言葉をかけよう。

すれ違ひざまでも良いから……と、心を決めて、僕は前を見た。

類に口づけ（前書き）

B L 展開突入。

類に口づけ

ライブハウスの中はざわついていた。何か非常事態が起きたらしく、いつもと雰囲気が違う。

「何があつたんですか？」

と、浩美がスタッフに尋ねると、予想もしない言葉が返ってきた。

「倒れたんだよ、ジュエルビートルのジュン君が」

ステージには暗幕がかけられ、救急車が来るのを待っているところだった。観客はざわついて、スタッフはその対応に追われている。

「な、何でや？」

友一も驚いた様子で言つ。僕は声が出なかつた。

外から救急車の音がして、やがて裏口から救急隊員が入つて来る。そしてステージから氣を失っている純を運び出す。その様子を見て、僕はとっさに叫んでいた。

「行かせて下さい、彼氏なんです！」

その声が思ったよりも響いていたことに、僕は気付かなかつた。

純が倒れた原因は、ストレスによる貧血だった。

「……愛斗つてさ、馬鹿だよな

「え？」

病院のベッドの上で、純が笑う。

「オレのことなんて、放つときやいいのに

結局ライブは中止になつた。ステージの上で倒れた純を追いかけた僕が一番悪い。

「……う、うん。でも僕、純に言いたいことあつたし、さ

「そんなの、メールでも言えるだろ」

「そ、そつかな……」

けれども僕は、純に何て言えばいいのか分からなくなつていた。みんなの前で「彼氏」と宣言してしまつたくらいだし。

「……が病院じゃなかつたら、すぐにでも襲つてやるんだけどな」と、純。

「……お、襲うとか、襲われるとか、って、どうやるもの?」

密かに気になっていた質問をすると、純が目を丸くした。

「簡単だよ。相手のケツに自分のを」

「ち、違くて!だから、その、ど、どんな感じなのかなってやり方くらいはなんとなく知っている。僕が知りたいのは、もつと精神的なことだった。

「興味あるわけ?」

「ち、違う……はず」

自覚したくないだけだと、頭の片隅で僕が僕へ囁く。純に対しても真面目に向き合つてみたい、と。

「じゃあ、キスするか?」

「い、嫌だよっ」

純が僕の目を見つめてくるので、僕は顔を逸らした。

「でも、嬉しかったな」

「?」

「目が覚めた時、お前がそばにいてくれて」

「……」

白い天井を見上げる純の顔は、何故だかとても綺麗だった。ストレスなんて感じないような顔でふざけたことを言う彼には、誰にも見せない弱い部分があるらしい。

「純」

「何?」

「友達以上恋人未満じゃ、駄目かな?」

「……じゃあ、触つても良い?」

と、純が僕へと手を伸ばす。

「ぼ、僕は、その……女の子しか知らなかつたから、まだよく分かんなくてさ」

純の手が僕の腕を掴む。

「でも、恋人未満で良いなら、付き合つよ
「オレは、その上には行けないってこと?」

「……分からない」

そつと純の手が僕の胸に触れ、少しひくっとしてしまう。
「キスは?」

「わ、分かんないよ。男と付き合つたことなんてないもん!」
純は上半身を起こすと、あつという間に僕の頬に口づけた。

「じゃあ、今はここまでな」

と、につこり笑う。

僕は呆然としながら、後悔なのか安心なのか、よく分からない気持ちに悩まされていた。

「朝兄、夜兄、ごめん。僕、本当にそくなっちゃうかも」

翌朝、出かけて行く一人の背中へ僕はそう呟いた。

相変わらず兄さんたちは僕を応援しているし、離れて行く様子もない。いつまでこの三人暮らしが続いていくのか、考えるだけで嫌になる。

けれども僕は二人の知らないところで心変わりしているようだし、それを受け入れてしまった兄たちの態度は責められない。

「……もうやだ」

僕と純が付き合つているという噂まで流れ出してしまった。話題になるので面白い、と、浩美たちは何も気にしていない様子だし、ジュエルビートルの人たちも特に嫌なわけでもないらしい。

本来は良くないことだと思うのだが、僕の周りは生憎と変人ばかりだ。

けれども、もし浩美や友一、キオが男性を好きになつても、僕はきっと嫌だとは思わないのだらう。それどころか、兄たちのよう応援してしまう気がする。

「……しょーがない、か」

そう呟いて、僕はバイトへ出かける準備始めた。

純は細い。僕よりもちょっと身長が低いだけなのに、やうりとじている。

綺麗な一重は子どもっぽくて、笑った顔は童顔だ。
ギターをやつているだけあって、手は綺麗で指も長い。

どう見たって彼は僕よりも体重が軽い。

僕はドラマーだから、最低限の筋肉は付いてる。といつよりも、高校の時に頑張つて付けた。

なので体格はそこそこ良い。顔は……普通じゃないかな。田は奥一重だけど、特に不細工なバーツもないし。

兄さんたちは、ぱつと見イケメンだ。黙つていればモテるタイプだろう。母もそう言つていた。

朝兄は口が悪いし、不器用。夜兄は妙に女々しくて、草食系男子の代表みたいな感じ。

けど、僕は普通だ。あえて言つなら、上の下あたり?いや、中の上、かな。

とにかく、僕は普通なわけだ。

他に身近なイケメンと言つたら、浩美だろつか。もう見慣れてしまつたのでそうは思はないのだが、美形の部類に入るらしく女子にモテる。身長も高いからなおさらである。

友一は僕と同じで普通だし、キオは童顔だ。背が高いのも、幼く見られる原因だろつか。

そう考えていくと、確かに純は可愛い系のイケメンかもしそれない。

僕らの目指す方向

女の子に対するドキドキには安心感が付きまとつ。末っ子で一人の兄に甘やかされて育つたせいか、僕はどうもしつかりしている女性を選んでしまう。

それでいて、可愛い女性が好みだ。時々、突拍子もないサプライズをされるところにキュンと来る。

「……ごめん、純。何があったの？」

ぶわわっと眼前に咲く花々、フローラルな香り。

「花屋でバイトしてる妹がくれた」

「……へ、へえ」

サプライズは素直に嬉しい。けれども、キュンといつよりはグサツて感じだつた。何か、悪いものが胸に刺さつた感じだ。

「彼氏が出来たつていう度にくれるんだよな、オレの妹つて」と、純は言つ。

「つてゆーか、妹さんいるんだ?」

「おう。その下には弟もいるぜ」

「……お兄ちゃん、なんだ」

「知らなかつた?」

にこにこする純を横目に見て、僕は思わず溜め息をついた。

「はつきり言つても良い?」

「どうぞ」

「僕、純のこと全然知らないんだけど」

すると純ははつとして、またすぐに笑つた。

「オレのこと知りたいのか? だよなあ、友達以上だもんなあすっかり元気になつた彼は、以前よりも調子に乗つてゐる。

どうやら、ストレスというのは僕が原因だつたらしく、純はこう見えても真面目だつた。罪悪感とか、後悔とか、いろいろなもので彼も悩んでいたらしい。

「ジューエルビートルでギターやってる」

「知ってる」

「曲のほとんどはオレが作ってるんだぜ」

「へえ」

「初耳だった。」

「あと、たまに「コーラスやる」

「うん」

「あとは……そうだな、一人暮らしだよ」

「あ、良いなあ」

無意識に口をついて出た。僕だって元は一人暮らしがしたかったのだ。

「あれ、お前実家？」

「ううん、兄さんたちと二人で暮らしてるんだ」

溜め息について見せれば、純が笑う。

「じゃあ、オレと一緒に暮らすか？」

僕は純の顔を疑わしげに見てきつぱりと言ひつけた。

「遠慮するよ」

そんなことしたらあつといつ間に一線を越えてしまう気がした。さすがにまだ、心の準備が出来ていないので無理だ。

「つまんねーの」

と、純は言う。

「……ってゆーか、これはどうしたらいい？」

受け取った花束に再び目を向ける。

「別に捨ててもいいし、持ち帰ってくれても良いぜ」

「うーん……」

持ち帰つたら、きっと夜兄がすぐに花瓶に挿すだろうと思いつのだが、何だか嫌だ。

「とりあえず、持ち帰らつかな」と、僕は言った。本心では、近所のゴミ捨て場に捨てるつもりでいる。

「お、そうか？ やっぱ優しいな、お前って
そう言つて純がまたにっこり笑う。優しいのは僕じゃなくて、純
だ。

花束を捨てて家に帰ると、兄さんたちが僕を見て目を丸くした。

「遅かつたね」

「ああ、うん。ちょっとね」

すると一人が顔を見合わせる。構わずに僕が自室へ向かうと、ちらりとだけ会話が聞こえた。

「変わったな、あいつ」

「純くんと会つてたのかな？」

何も知らせていなかつたはずなのに、何故だか一人には見抜かれていた。

自分で演奏するのももちろん好きだが、音楽は聴くのも好きだ。バイクの帰りに寄ったCD店には、メジャーで活躍するミュージシャンたちの音楽が溢れていた。注目のロックバンドと巷で話題になっている五人組のポスターに、人気アイドルユニット、今年で二十周年を迎えるソロアーティスト。

目当てのCDを購入して、僕はふと立ち止まる。

僕らの目指す方向は、どこなのか。今はインディーズで、ようやくライブハウスで名前が知られるようになってきた。けれどもメジャーデビューにはまだ遠くて、僕らは本当にずっとこのまま、同じ道を走り続けられるのだろうか。

純の目指す方向は、僕らとは違うのだろうか。純はギターが上手いし、ファンだっているはずだ。僕らは、純たちは、何を見つめているのだろうか。

「……」

夢、か。

ライブハウスは盛況だった。

「つかのドラムとジユエルビートルの純が付き合つて話した
ら、あつという間に売れたんや」「
と、楽しそうに友一が話す。

「え？」

「噂のおかげだな。ま、俺はいつもノルマ達成してるから関係ない
が」

と、浩美。

「ボクも今回全部卖れたよー。愛斗様々つて感じ」「
え、いや……」

キオまでそんなことを言つので、僕は居心地が悪くなる。ただで
さえ、チケットのノルマは兄さんたちに協力してもらつていいだけ
に、僕は素直に喜べない。だつて僕、何にもしてないよ？

「今回は無理だけど、次のライブで何か企画するか？」「
は？ 企画つて」

「ジユエルビートルとセッションに決まつてゐやろー」「
むしろ純と愛斗の一人だけとかはー？」

勝手に盛り上がる三人を見て、僕は溜め息をついてしまつ。

「そんなことして何になるの？ 誰が喜ぶの？」「
すると浩美がやりとする。

「意外といるんだぜ、腐女子の子」「
僕を見世物にするつもりか。

「みんなの前でキスとかしたら、絶対に盛り上がるで」「
くくく、と愉快そうに笑う友一。

「ファン増えちゃつたりしてね」

と、キオは何故かあり得ない期待を抱きはじめる。

「無いない。つづーか、まだキスしていないんだからね」「
思わずそう声に出して、僕ははつとした。三人はにせにせと僕を

見ていく。

「べ、別に、キスしたいとか、そういうわけじゃ

「乙女だな、愛斗

「よし、これからはマナちゃんって呼んでやるわ

「良いなあ、ボクも恋したい

……これからは出来るだけ口を慎もう。そう心に誓つ僕だった。

純が彼氏になつてから、一ヶ月近くが経つていた。

その間に起きたいろいろな事柄が、僕をいつの間にか変えていた。

「愛斗、お洒落になつたね」

「え？」

浴室で出かける準備をしていた僕は顔を上げる。

「また彼に会うの？」

と、夜兄がにこにこしながら尋ねる。

「……う、うん」

その通りだつた。今日はバイトの後に純と会う約束があった。

「どんな感じなの？」

夜兄の問いかに、僕は答えを迷つてしまつ。仲良くなつてゐる、と言つのは変だらうか？

「まあまあだよ」

と、僕は返して部屋を出る。

「夕飯は？」

「食べてくるからいらぬ」

足早に玄関へ行き、靴を履く。

「そう。気を付けて行つてうひしゃー」

「うん、行つてきます」

背後の兄を見ることなく、僕は扉を開けた。

嘘が本物になりつつある今、僕は無意識に兄たちと距離を置くようになつていて。まさか、純に会つのが楽しみだなんて……言えない。

「最初のライブを入れると、デートするのせいで四回目か」

と、純は笑つた。

ライブハウスで顔を合わせるのもあるので、一週間に五回は純

と会つてることになる。一ヶ月だと十回くらいか。

「けつこう頻繁だね」

僕がそう返すと、純は笑つた顔のまま言つ。

「ま、だいたいは夜だけだな」

「そういえばそうだった。昼間の明るい時間に純と会つたことはほとんどない。」

「……でも、もう一ヶ月になるんだよね」

独り言のつもりで呟く。すると純は少し遠くを見た。

「いつになつたら、恋人以上になれるんだろうな」

「……ごめん」

純が僕に対し今以上の関係を望んでいることは知つてゐる。けれども、いざキスをしようとする拒否してしまうのだ。

「はは、謝ることねーよ。オレ、気長に待つてるからさ」

「うん」

彼女と付き合つてゐる時は、別に覚悟なんて必要なかつた。したからキスをして、したいからセックスをしていた。けれども今は、何故だかそれが出来ないのだ。

「純は、男の人と付き合つたことあるの?」

「え?」

純が振り向き、「あー」と、考える様子を見せせる。

「まあな。付き合つたつづーか、中学ん時に襲われてさ」

と、笑い事のように言ひ。詳しく聞くのは怖いのでやめておくが、気になる発言だった。

「そ、そりなんだ」

「ちゃんと付き合つたのは高校ん時かな」

「女の子とは?」

「一応、何人かと付き合つた。でも何か、しつくつこなくてすぐに別れたな」

どうやら、純は異性相手にやるだけのことばやつたらしく。

「で?」

「ん、お前だよ」

と、純が僕を見る。

「初めて対バンした時から気になつてた
もう半年以上前じゃないか。」

「で、ある時、お前の胸板見て、惚れた」

そう言つていたずらっぽく笑う。僕は呆れながら言葉を返した。

「なるほどね」

もしかすると、純と浩美が仲良くなつたのも、僕に近づきたいからだつたのかもしれない。浩美はあんな性格だから、きっとその様子を面白がつていたはずだ。

「よし、じゃあホテル行くか」

「は？」

突拍子もない発言に僕が目を丸くすると、純が言つ。

「嫌か？」

「うん」

素直に返せば、純が肩を落として見せる。

「残念だなあ。オレ、明日は午後からバイトで暇なのに」

「……知らないよ」

だいたいにして、ホテルつてどこへ行くつもりだ。男一人で入れるのか？

「じゃあ、とりあえず」

と、純が立ち止まって僕を真っ直ぐに見つめた。

「ちょ、純、ここ歩道」

行きかう人たちの視線が気になる、と教えてやれば、純が「冗談に決まつてるだろ」と、笑う。

「冗談がきつすぎるよ」

と、僕は溜め息をつく。

どちらにしても、キスする直前で僕が嫌がつて失敗するはずだった。

けれども、純の想いを知つてはいるだけに、僕にとつては何が本当

で何が冗談か分からぬ。いちいちドキドキしてしまつのが、自分
でも嫌だつた。

送られたメール

友一の管理しているホームページが恐ろしくなりつつあった。

「問い合わせメールのほとんどがお前宛てや」

それは僕ら『ラティ』の公式サイトなわけだが、アクセス数が半端じゃない。

それを証明するのが、送られてきたメールの数だ。

「この三日間だけでも一十通」

「……何で？」

「知らんわ」

と、友一はマウスを動かしてその内の一つを開ける。

「ジユエルビートルのジュンと付き合つて本当ですか？ それと次のライブ、絶対に行きます！」 やて

友一はどこか呆れた口調でそう言った。

「何か、思ったよりも広がっちゃってる？」

「誰かがどこかの掲示板に書き込んだらしいで。それが地味に広がつたつちゅう感じやな」

インターネットは恐ろしい、と、僕は思つ。

「マイスペの閲覧数も半端ないでー」

と、友一が僕を見た。

「……」「じめん」

まさかこんなことになるとは思つてもいなかつた。けれども、よくよく考えると僕は彼氏を欲しがつていたわけではなく、そうしたのは浩美や友一たちであつて。

「どうしたらいい？」

泣きそうな顔で僕が尋ねると、友一は笑つた。

「別に良いやろ。俺らの知名度が上がるだけやし」「で、でも

「もしかすると、もつとでかい箱でライブ出来るようになるかもし
れへんで?」

どうやら、友一は良い方向に捉えているらしい。バンドメンバー
に同性愛者がいたら、いつかはバッティングやら何やら受けそうなも
のだが……。

「それに嘘ついてるわけでもなければ、俺らが公式でそう言ったわ
けでもないんやし」「

と、友一は笑う。

「そ、そうだよね」

ファンの人たちからしたら、僕らしき人が純の彼氏だと言う声を
聞いただけだ。仲間たちや周りの人人が何と言おうと、僕はまだ何も
発言していないのだから許される。

「最終的には、パフォーマンスでも良いんぢやう? ま、お前があ
いつと付き合いたければそつそつや良いし」

「……う、うん」

噂を現実にしてしまっても、飽くまでも噂だったとしても、僕ら
に今注目が集まっているのは確かだ。

「とりあえず、このメールどうする? 田通すか?」

友一が僕にも見やすいよう、横へずれる。

「うん、一応読むよ」

そう言って僕は画面へ目を向けた。

キオの作ってきた詩は、相変わらず不思議な雰囲気を持っていた。
韻を踏むのが好きなキオらしく、サビの言葉の並び方は軽快だ。

「で、これが曲だ」

と、浩美がテープを流す。

僕らの歌は、浩美の作曲したものをほとんどそのまま完成系へと
持っていく。楽譜を見て、実際に演奏して、問題があつたら直すべ
りに手を加えることはない。

「うん、やっぱり浩美はメロディメーカーかな」

曲が終わると、友一が最初にそつ口を開いた。

「けど、ギターソロはもう少し派手でも良いんやつ?」

「例えば?」

と、浩美。

友一はすぐにギターを構えると、即興で弾いて見せた。サビを踏まえつつ搔き鳴らす友一の音だ。

「何かちやうな。でも、『こんな感じが良い』

浩美は納得すると言つた。

「分かった。じゃあソロは友一に任せる」

浩美の作ってきたものは設計図みたいなものだから、時には文句も入る。僕もちょっと引っかかるものがあったが、実際に叩いてみれば分かる」とと思つてやめた。

「次のライブのチケット、あるよな?」

朝兄に聞かれて、僕ははつとしました。

「え?」

「だから、チケットだよ。今回もひやんと金払つからな」と、笑顔を向けてくる。

「あ、その……ごめんなさい」

僕が頭を下げるとい、朝兄が呆然とする。

「は?」

「あの、何か、今回はネット経由でチケットが売れるやつで」

「こんなことは初めてだった。

「嘘だろ?」

「いや、本当のことだよ。ちやんと、兄さんたちの分は取つておくれつもりだつたんだけぞ」

「……そうか。やつと自分たちの力でチケットを売れるようになつたわけか?」

「え?」

朝兄の発言にびっくりした。確かにそつと言わなければそつだけれど

ども、何か違ひ。

「成長したな、偉いぞ」

と、朝兄が僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「あの、ちょ……」

僕が嫌がつて逃げれば、朝兄は不満げにしながりも冗談で口をつけて言つ。

「その調子で頑張るんだぞ、愛斗」

「あ、うん……」

どうやら兄さんたちは、僕と純の同性愛疑惑のことを見抜いたらしい。

そのおかげでチケットが売れたのだけれど、兄さんたちには言わないでおいた。ややこしくなる気がする。

僕に依存する彼の精神

純は言った。

『それなんだけどさ、クレーム、来たんだよな
え？』

『ホモのいるバンドなんて応援できない、って』

電話越しに響く彼の声は、いつもと違つて落ち込んでいた。

『……そり、なんだ』

『愛斗の方は？ 何かなかつたか？』

と、僕を心配する声。

「うん、いつもは平気。みんなも悪いことだとは思つてないみたい
だし」

そう返せば、純が安堵の溜め息を漏らす。

『それなら良かつた』

良くないよ。

「でも、純は？ 他のメンバー、どう思つてるの？

『……分かんねえ』

遊びと本気は、全然違つからな。

そう言つ声を聞いて、僕は何となく、彼が泣き出しそうな顔でいる気がした。

外で会うのはまづい。その為に僕は、純の暮らしているアパートへ來た。

「ちょっと散らかつてゐるけど

と、純が言つ。

中へ足を踏み入れると、確かに部屋の中は散らかっていた。僕が一人暮らしをしたら、きっと同じようになるのだろうけど。

「つづーか、いいの？」

「何が？」

純が僕を窺うように見る。

「ここ、オレの部屋だぜ？ 隣の人いないし」
分かっていた。僕だって、好きな女の子を部屋に呼んだことがある。もちろん、そこには下心というものがあった。

「うん、知ってる」

純だつてこんな密室に僕と二人きりでいたら、何かするにきまつてる。

「……そっか」

純は簡単に部屋の中を片づけると、僕へ言つた。

「どうぞ座つて」

「うん」

壁際に置かれた一本のエレキギターと一本のアコースティックギター。その隣にある棚には楽譜やCDがたくさん詰め込まれている。グラスを一つ取つて戻ってきた純が、冷蔵庫から取り出したお茶を注ぐ。

「……」

「……」

気まずかった。外にいると嫌でも話題があるはずなのに、今日は何も浮かんでこない。

「……あの、さ」

と、口を開いたのは純だつた。

「何？」

僕は彼の顔をちらりと見る。

「昨日、スタジオだつたんだ」

語り始めた純の声に、耳を傾ける。

「うん」

「オレ、あんま調子よくなくて、そしたら……みんなと喧嘩になつて」

原因是聞かなくても分かっていた。

「噂になつてるのが嫌なんだつて、言われた。すぐに別れる、そう

したら今まで通りやつていける

「……うん」

別れるも何も、僕らはまだ本格的に付き合い始めたわけでもない
と、僕は思つ。キスだってしてないし、セックスだってしていない。
ハグすらまだだ。

「オレは嫌だつて言つたけど……」

と、純は僕を見た。

「やっぱり、別れるべきだつたんじゃないかな、あの時

純が本当のことを僕に告白してくれた時。

「追いかけたオレが、悪かった

と、自嘲するよつに笑う。

「じめんな、愛斗」

「この前の電話の時も、きつと彼はこんな顔で笑っていたのだろう。

そう思つただけで、悲しくなつた。

「噂のきつかけを作つたのは僕だよ。純は悪くない」

「……でも」

「だつて僕は、少なくとも嫌だとは思わなかつた。好きでいてくれたことは、素直に嬉しかつたよ」

誰も知らない弱いところを見せてくれるのも、きつと僕にだけなんだろう。それなら。

「良いじやん、男の人を好きになつても。僕を、好きでいても」
きつと純は、今までにも似たような壁にぶち当たつてきたはずだ。
それでも僕を好きになつてしまつたのなら、受け入れるしかないじ
やないか。

「みんなは嫌かもしれないけど、そう簡単に諦められるの？」

純が首を横に振る。けれども彼は、泣きそうな声で言つた。

「でも、一度でいい。愛斗とキスできれば、それで諦める」
ショックだつた。惚れさせるつもりだと強気に言つたのは、嘘だ
つたのか？

「……僕は、きつとそれじや、嫌だよ」

無意識に出た言葉が、純の顔を上げさせる。

「でも、愛斗」

「だつて僕は、もつと純のことが知りたいもん」

「お互いにはつとする。

「……冗談、やめろよ」

「……じょ、冗談のつもりじゃなくて、でも、そのきつと僕は、もう戻れない。純が本当は弱い人だつてこと、知つてしまつたから。

「オレで、いいのか?」

「う、うん」

潤んだ目まま、僕をじつと見つめる純。

静かに伸ばされる手が、僕の顎を取る。身体全体がドキドキして、僕はぎゅっと目を閉じた。

重ねるだけのキスだつた。

あつという間に離れてしまった彼を、惜しいと思つ。

「……これ、だけ?」

「は?」

「え、あの、も、もつとこいつ……」

ちゃんとしたキスがしたい、と言つのが恥ずかしくて僕は口を閉じてしまう。男相手に期待する恥ずかしい自分と、純相手に高揚する自分が戦つていた。

「……しても、いいの? 後悔しない?」

と、純は言う。僕は頷くこともせず、ただ彼の目を見つめた。

先ほどよりも近くに寄つて、また唇を重ねる。口から、舌から、僕の中を侵食していく。

自然に伸びた腕は互いの身体を触り、不思議なほどにその今が心地良かつた。

別れ際、純は笑っていた。

「じゃあ、またな」

僕も手を振つて応える。

「うん、また」

改札を抜け、ふと振り返る。

純はまだ、僕に向けて微笑んでいた。

依存、という言葉が、きっと僕らにはお似合いだ。好きだと
か、惚れたとか、そんなことじやなくて、僕は僕に依存する彼の精

神を、ただ愛しいと思つた。

僕に依存する彼の精神（後書き）

これは純愛なのか、愛純なのか。想像にお任せします。

夢への道

季節はあつとこゝう間に過ぎ去る。暑い夏は、こゝの間にか涼しい秋になつていた。

僕らの知名度は上がり、今のライブハウスでライブをすることすら怪しくなってきた。

「もつとでかい箱でも歌えるつて言われたんだが」と、浩美が溜め息まじりに言つた。

「行けると思うか?」

沈黙を破つたのはキオだつた。

「うん。行けると思ひ」

と、にっこり笑う。いつもと変わらない様子で笑う彼は、こゝいう時にはとても頼もしく見える。

「つてゆーか、行っちゃおうよ? ボクら、これでもメジャー目指してるんでしょ?」

「ああ、そうだな」

僕は何と言えばいいのか分からなかつた。僕の隣にいる友一もまた、俯いていた。

「ボクは、行ける所まで行きたい。せめてキャパ千人超える箱でやりたい」と、キオは真剣に目を輝かせる。

そうだ、今は二百人程度のライブハウスでしかない。でも最近は僕たちを見に訪れる客が多いのだから、もつと上まで行けるはずだ。「うん、僕も賛成だ。やれるところまでやってみよ!」

顔を上げて発言すれば、キオが嬉しそうに頷く。

「……そいやな、やるだけやってみるか!」

と、友一も言った。

浩美はすると、どこか儀式的に言った。

「じゃあ決まりだな。俺たちはウェンズ・レーベルに所属する

何も知らされていなかつた僕たちは、一様に目を丸くする。ウンズ・レーベルといつたら、インディーズでも有名なレーベルじゃないか！

「え？」

と、首を傾げるキオ。

「俺たちに興味を持つてくれた人がいて、それでレーベルに付いてないなら所属しないか、って」

「嘘やろ!? 何でそんな、俺たち全然やのに！」

叫ぶ友一を宥めつつ、僕は言つ。

「それは、信じても良いの？ 本当にそこまでやつてこけるの？」

「ああ、大丈夫だろう。ただ、売りがな

ど、浩美が苦い顔をする。

「ドラマの愛斗を中心にしきりと言われたんだ」

「……え？」

聞き返すと、浩美が溜め息をつく。

「ただの噂だつて言つたら、それでも良いからキャラ作つてやれとのことだ」

キオと友一が口を閉じた。

「……マジで？」

「ああ」

「そつか……」

溜め息したくなつたがこらえる。一體僕らの何が良かつたのか、全く分からぬ。

「滅多にないチャンスだ。でも、今までいられるとは限らない申し訳なくなつた。僕のせいでこんなことになつて でも、やっぱりこれはチャンスもある。

「やるか？」

「うん、やろ」

と、キオがまた頼もしい言葉をかける。

「別に愛斗中心でも良いじゃん。ボク、注目されるのってあんまり

好きじゃなかつたしや」

外見とは裏腹にしつかりしている。

「せやな、やつてやひやがないのー。」れも愛斗のおかげやー。」

と、友一も笑う。

僕は一人、嫌なぐすぐつたさを胸に感じていた。

「……うん、ありがと」

他の人たちよりも一足早く、僕らは一步先へ歩み出す。それが良いことなのかどうかは、今はまだ分からない。

ウェンズ・レコードは話に聞いたよりも良い会社だった。

彼らは僕ら『ラティ』を注目の新人バンドとして売り出してくれることを約束してくれた。代わりに、僕が表向きのリーダーとなる。

「じゃあ、これから忙しくなるの?」

と、夜兄が問う。

「よく分かんないけど、たぶんそうなると思つ」

来月のライブでレーベルに所属して初のお披露目となる。

「給料は?」

と、尋ねる朝兄へ僕は言ひ。

「分かんない」

まだ始まつたばかりだし、きちんととしたレーベルに所属するのは人生で初めてのことだ。

「そう。良かつたね、愛斗」

「うん」

「ま、後はお前らがどこまで頑張れるか、だな」

「うん、分かつてる」

何だか、兄さんたちのおかげで夢への道を近道してしまったようだ。

「純くんはどうなの?」

と、夜兄。僕は少し俯いて答えを返した。

「それが……僕らとは反対に、解散するかもって
二人がびっくりして目を丸くする。

「何でだよ?」

「何があつたの?」

僕は頷くだけにした。

「うん。詳しいことは聞いてないから
兄さんたちのせいでの夢への道を遠回りせざるを得なくなつたの
だ。けれども、そんなこと一人に言えるはずもなかつた。

そんな兄さんたち

「ヴォーカルのキオと、ギターのユーリア、ベースのひろ美で、ドラムのマナト」

純がぽつりと呟く。

「ツインギターにする気、ないよなあ」

「……ごめん」

僕はそう言つて俯いた。

「気にするなよ。オレは大丈夫だから」と、純は笑つてくれたが、きっと心の奥では笑えていないだろう。「でも、さ」

僕はこれからのことを考えながら、純へ言つ。

「彼氏がいるって言つても、僕の場合は何か違う気がするんだよね」「違うって？」

「だから、純のことは確かに好きだと思つけど、男性に興味あるわけじゃないで」

純が僕の肩を抱き寄せる。

「お前、気づくの遅いな。男だから好きなんて、不純すぎるだろ」と、いたずらっぽく微笑む。

「……そ、そうかな」

「そうだよ。オレだって、お前以外の男に興味ねえもん」

そういうえば、女の子だから好きになる、なんてことはなかった。その人が好きだから、好きになるんだ。

そのことに気が付くと、何だか胸がちくちくとすべぐったくなる。

「うん、そうだね」

そう僕は答えて、顔を上げる。

純の後頭部に手をやつて、そつと頬に口づけた。

「ごめんね」

彼は目を丸くしていたが、にっこり笑うと僕の身体を引き寄せせる。

「オレの分まで頑張れよ」

「……うん」

ぎゅっと身体を抱きしめあつ。僕の頭から不安や怯えなどの余計な事が、すつと消えて行く。

「……愛斗、愛してる」

「うん」

これまでちゃんとしたマネージャーはいなかつた。営業だつて四人でやつてたし、CDも全て自費で作つていた。言つてしまえば、現代に似つかわしくない地道な活動をしていたわけだ。

それが、突然こんなことになつた。

「マネージャーの小野と申します。よろしくお願ひします」「にかつと笑う爽やかな青年。どう見ても僕たちよりも年上で、三十歳前くらいに見える。

それぞれ戸惑いながらも、よろしくお願ひしますと頭を下げる。事務所に所属するだけでこんなに違うものなのか。

「早速なんだけど、来週、写真撮るから」

「写真？」

浩美が聞き返すと、小野さんは人の好い笑顔のまま答える。

「フライヤーの写真だよ。一応こんな感じで」

と、その詳細の書かれた紙を僕らへ見せてくれた。

「今回は時間ないから、衣装は勝手に決めさせてもらつたよ。当田は現地集合ね」

キオが小さく「うわあ」と、声を上げた。そこに書かれていたのは、僕らに関するイメージだつた。キオは童顔なので少年のイメージ、用意される衣装は原色を使ったパーカーに膝丈のズボン、といつことだ。

「……あのー」

友一が小野さんへ声をかける。

「これって、マジですか?」

「どうやら動搖してこりしべ、友一の言葉には関西弁も説りもな
い。

「もう決定してる」とだよ。何か問題でも?」

「いや……そのー」

再び紙面に目を向けて、友一は言つ。

「俺のキャラ忘れてません? いつ見ても、関西出身なんですか
ど」

友一のイメージは中間、衣装も縁をテーマにありがちなものを用
意してくれるそうだ。

「え、そうだっけ? まあ、これからいろいろでも変えていくから
安心して」

と、小野さんは笑う。

友一はどちらかといつて、親しみやすい関西人を自称してくる。
中間、というのはつまり普通なわけで、それが友一は嫌なのだ。

「はあ……」

しかし人見知りなせいもあるのか、上手く意見を主張できずに終
わる友一。

僕のイメージは男前、と書かれていた。衣装も黒のワイシャツに
ダメージジーンズと、男らしさを強調されている気がする。
ちなみに浩美のイメージは、マナトの対だった。衣装も白でまと
めるらしく、僕が男前なら浩美は美青年、といふことらしい。

何か間違えているような気もしたが、とりあえず流れに任せてみ
よう。

「へえ、マネージャー付いたんだ。すごいね」

と、夜兄は言いながら茶碗にごはんをよそる。

「活動が本格的になつたら、機材も揃えた方が良いくてさ」

「じゃあ、お前もドラマ買うのか?」

と、座っている朝兄が僕を見る。

「お金が貯まらないと買えないから、しばらくは無理だよ

僕はそう言つて言葉を続けた。

「だから、しばらくは今ままかな」

自分専用のドラムセットなんて、ひとつ貯金しなけりや買った物ではない。ギター やベースなら十万もあれば中古で良い物が手に入るかもしけないけど、僕の場合はそうはいかない。

「だよな。まあ、スネアくらいなら買ってやっても良いぞ」

「え?」

「そうだね。誕生日プレゼントとこう」と

と、自分の分までよそい終えた夜兄が席へ着く。

「なー」

「ねー」

意見が合つたのか、にこにこと顔を合わせる兄さんたち。僕はそんなことをせられないと思い、慌てて口を開いた。「いいよ、別にそんなことしなくて。スネアだって安くないんだから

どんなに安くても三万はする。良い物になると、その何倍もあるのが普通だ。そう簡単には買えない代物である。

「遠慮するなつて」

「それとも、新しいペダルにする?」

「いや、あの、そういうことじゃなくて……えつと

乗り気になつた兄さんたちを止めるのは、とても難しい。ましてや僕の為だと言わると、弱い。

「その、今の環境で、どこまでやれるか試したいんだ」

思つてもないことが口をついて出た。本心では、ちゃんと環境を整えたいのだけれど。

「今まで通りにやつてみて、駄目ならその時に考え方ひとつと思つてて」と、僕は一人を見る。

すると、兄さんたちは納得した様子で頷いた。

「どうか。愛斗がそう言つなら仕方ないな」

「今が、自分の実力を知る良い機会だもんね」

一応は分かつてくれたようだ。僕は安心して息をつく。

兄さんたちは、僕が冗談でもドラマセットが欲しい、なんて言つたら、本気で買ってくれちゃうような人たちだ。どんな難題でも、僕の為なら金も時間も惜しまない。

「愛斗は結構ストレス溜めやすいからな、無理するんじゃないぞ」「何かあつたら俺がいつでも話は聞くし、相談にも乗るからね」そんな兄さんたちのことは嫌いじゃないけれど、過保護過ぎて嫌なのが僕の心情だった。

いつになつたら、弟離れしてくれるのだろうか？

何気ない瞬間

前面に出るキオ。後ろに並んだ三人。その中心は僕。

「……」

純が見たいとつむさかつたので、出来上がったばかりのフライヤーを一部だけちらって来たのだが、純は何も言わずに眞を見つめていた。

「……変だよね」

僕がそう言いつと、純はぱみつといひらを振り返る。

「あー、何でいうか……すげーかっこいい、お前が」「は？」

呆れてフライヤーを返してもうおうとしたら、純が避けた。

「もううちゅやダメ？」

僕の目を見つめる視線に負けそうになるが、僕は言つ。

「まだ兄さんたちに見せてないからダメ。あの二人がつむさこの、知つてゐるでしょ？」

「……そつか」

純はどこか名残惜しそうに一次元の僕を見つめる。

「つていうか、いろいろおかしいんだよ」

もう一度手を差し出して、今度こそ返してもうつ。

「どこが？」

「キオはかわいこぶつてるし、浩美なんてメイクしてゐし、友一はかつこつけてるし」

「でも、お前似合つてゐよ」と、純。

「お世辞言われても嬉しくないよ」

やつ言いながら、フライヤーを鞄へとしまつ。

「マジなのには」

と、純が顔を近づけ、僕をじっと見つめる。あまりにも近いので

後ずさりのと、床へ両手をつく。

「愛斗は変わったと思つ。初めて会つた時よりも、すげーかつこよくなつてゐる」

「半は僕の上に乗った状態で、純かに」と笑った。

「そ、そんなことないよ。」

「何でお前は、いつも無自覚なんだろうな。ちょっとは自信持つて思わず口を逸らすと、完全に押し倒された

も良いのに

と 僕を見下ろす

カーラ・ミルヌ著『心の整理』

「まあ、そんなお前が好きなんだけどさ」

と
絆が層を重ねてくる

「誰が何と言おうとも、僕は今のままの僕で良い!」

「……でも、純がそいつになり認めるよ」

僕が総論を言葉になると
総が傍に寝転んだ

卷之三

具体的な数字を求められ、僕は高校時代にまでさかのぼる。

「十分だろが」

と、純が笑う。

お前モテモテじゃん

馬鹿野郎だからお前を殺すとおもったが、おまえが馬鹿っておも

合つたりした。専門学校でもいくつか出会いはあつたわけだし。

「うひつねーん、オホシーナハジマ

「あい一はても付きましたね？」

「あー、そういえばそうだった。変なところ真面目なんだよね」

と、僕は笑う。自分が好きな相手じゃなければ、浩美は告白されても断つてしまうのだ。もつたいない、と友一がよく言っている。

「あれ、じゃあ純は？」

「ん、前にちらりと言つたと思つけど、オレは女子一人に男子一人だけ」

意外だった。純の方が、もっと経験あるような気がしていたから。「その女子つてのもさ、一人はほとんど勢いで付き合つただけで、一週間で終わつたよ」

と、純。

僕は適当に相づちを打ちながら、純の方へ寝返りを打つ。

「じゃあ、僕は四人目の恋人なんだね」

「オレは六人目だな」

言つて、二人くすくすと笑う。

「愛斗」

純が僕の頬に手を伸ばし、優しく髪を撫でる。

そんな、何気ない瞬間を噛みしめていた僕だったが、ふと純の手を取つた。

純が何かを待つような顔をして、僕はその手を放すと、純の上に覆い被さる。

さつきとは反対の体勢になり、今度は僕の方からキスを贈る。

「……愛斗」

純が切ない表情で僕を見上げていた。

もう一度舌を絡ませ、お互いの身体が求め合つのを確かめる。

事務所の所有しているスタジオは綺麗なところだった。

別の場所にはレコード・ティングスタジオもあるらしい、それは言つなれば僕らの知らない世界だった。

キオはどうやら、ラティの顔としての責任を感じ始めたのか、以前よりもキャラが固まっているようだし、浩美も以前に増してきり

つとしていた。友一なんて、早くも私服に気を遣い始めていた。「ライブまでもう一ヶ月切ったからね、頑張つてもらわないと、小野さんは言つ。

ぎいじなく中へ入り、僕らはやはりよそよそしく準備を始めた。音楽レベルなんていくらでも、どこにでもある。しかし、その元となる会社の規模が違うだけで、その差は広がる。

「……」

備え付けられたドラムセットは新品のようにキラキラしていた。他のミュージシャンたちも、このドラムを叩いているのだと思つとわくわくする。

見ると、浩美がアンプに手を奪っていた。友一はつきつきギターにケーブルを繋いでいる。キオはスタンドマイクの位置を調整しているところだった。

今はまだ不慣れだけれど、僕らはその内にこのスタジオに慣れてきて、事務所の雰囲気にも慣れてきて、マネージャーの小野さんとの仲も深まるのだろう。

準備を終えたキオが室内をうろついて始め、僕は早くドラムを叩きたい衝動を押さえながら、ペダルを置く。胸がドキドキしていた。

ライブまでまだ時間はあるけれども、それまでに僕らはあと一回、このスタジオで練習をする予定だ。そしてライブの時に売り出すミニアルバムのレコーディングをする。

これから先のことについてを馳せる。そしてふと、気がつく。純は、どうしているだろうか？

あまりバンドのことを話してくれないだけに、彼らの状況を僕は知らない。解散するにしても、いつが最後のライブになるのか、僕は知らない。

ギターのチューニングの音がする。もう一方では、ベースの音。中心に立ったキオの背中を見つめ、僕は呼吸を一つする。

次に会った時、純にはっきり聞かせてもらおう。僕らの状況

ではなくて、彼らの状況を^{いま}。

繋いだ手

週に三回しか、コンビニのバイトが出来なくなつた。給料は半分近く下がるのに、音楽活動にかかる費用が思つたよりもかかるので、金欠になるのが目に見えていた。

「ライブの後は、本気で忙しくなるかも」と、僕は純へ言つ。

「週に一度会えるようにしたいとは思うけど」

寂しいのか、純の手がそつと僕の手に重ねられる。

「無理しなくて良いよ」

と、純。

「……純、聞いても良い?」

「うん」

「ジュエルビートルはどうなつたの?」

まっすぐ彼の手を見つめると、純は手を逸らした。僕は純の手をしつかりと握る。

「本当に解散しちやつたの?」

純は答えに迷つてゐる様子だった。

あまりしつこく聞くのも良くないと思い、僕は口を開じて待つ。

「……もう、終わつた」

「いつ?」

「……一昨日の、ライブで」

純は優しい人だから、きっと僕に迷惑をかけまいとして何も言わなかつたのだろう。そんな気がしていただんだ。

「そつか

「うん」

繋いだ手を、そつと恋人繫ぎに変える。

「「めんね、純」

何もしてやれなかつた。責任は僕にあるはずなの。「ううん、謝るのはオレの方だ。本当に、『ごめん』と、純が手に力を入れる。

俯いて顔を上げない彼を、じつと見つめる。好きだとか、愛しているとか、そんな言葉では力不足だつた。

だから僕は会話を続けた。

「まだ音楽は続けるの？」

「どうだろ、分かんねえや」

いつもの口調で言う純。

「そりいえば、純のギター、ちゃんと聞いたことなかつたなあ

「……」

純が顔を上げて僕を見た。

「聞かせて」

と、僕はにこっと笑う。普段は恥ずかしくて、自分から笑うことつてほとんどないのだけれど、純が笑ってくれるなら嫌じやない。

「……うん」

純は立ち上がると、スタンドに立てたギターの前へ行く。普段から使っているエレキギターを取ろうとして、その隣のアコースティックギターに選び直す。

「アコギでも良い?」

「うん」

そして僕から少し離れたベッドに腰を下ろし、ギターを構える。

「オレ、弾き語りできるんだぜ」

と、純が笑う。そして、純は弦を弾き始めた。

聞こえてきたのは、数年前に流行したバラードだった。僕らにとつては青春の思い出ソングともいえる名曲だ。歌い出した声は、真っ直ぐで綺麗だった。

事務所でライブに関する打ち合わせがあつた。その帰りの電車の中で、浩美が僕へ言つ。

「あいつとはどうなってるんだ?」「え?」

「もう二ヶ月経つただろ?」「え?」

はつと気がつく。そういえば、Jリーグ最近は忙しくてそんなこと考
えもしなかった。といつより、もう二ヶ月以上経っている。

「あ、ああ、うん」

僕がどう答えようか迷つていると、浩美が溜め息をつく。
「まだ続いてるみたいだな」
見破られた。

「うん……」

電車が駅について、束の間の静寂が訪れる。

飽くまでもキャラだつて言つてるから、お前もそれを貫いた方が
良い

「うん、そうだね」

「……何かあつたらすぐ」相談しろよ」

電車の扉が閉まり、また動き出す。ガタンゴトンといつるさい車内
で、僕は咳く。

「ありがとう」

浩美が少し、笑つた気がした。

ライブまであと五日。

ドームの個人練習も重ねて、僕は少しでもいい音を叩けるようになろうと思つていた。

これから活動の拠点となる地域では、僕らなんてほとんど無名同
然だ。

応援してくれるファンが一人でも多くついてくれるよつ、頑張ら
なくてはならない。

……上手くいけば、メジャーだつて夢じゃないのだから。

「愛斗、これやるよ

と、通勤前の朝兄が差し出したのは一千円だった。

「え、兄さん？」

受け取れない、と拒否すると、兄さんはそれを僕へ押しつけてくる。

「金、ないんだろ。月夜の分と合わせて一千円だ」

朝食の片付けをしていた夜兄が、僕へ向けてにこっと笑う。

「……あ、ありがと」

確かに交通費はぎりぎりだつたし、昼食を抜けば余裕になる額しか持つていなかつた。まあ、小野さんはいい人だから、頼めば少しくらい貸してくれそうな気もしていたのだけれど。

「じゃあ、行つてくるな」

と、僕の頭をくしゃつと撫でて、玄関へ向かっていく朝兄。

「行つてらつしゃい」

僕もそろそろ、スタジオへ行く時間だつた。ライブ前の最後の合わせなので、今日はちょっと時間がかかるのだ。

自室へ鞄を取りに行き、中身を確認してから戻る。

「愛斗もそろそろ時間？」

「気をつけてね

と、夜兄。

「うん。ありがとう」

テーブルに置かれたままの千円札を一枚、財布へとしまづ。

「じゃあ、行つてくるね。帰り、遅くなるかもしないから

「うん、行つてらつしゃーい」

夜兄の言葉を背中に、僕も家を出た。

ポジティブな助言

「……笑っちゃダメ、ですか」

「そう。マナト君にはクールに演奏してもらいたいんだ」
スタジオ練習での休憩中、小野さんが突然僕へそう言った。

「く、クール？」

分からぬ。

「楽しそうにドラムを叩くのは良いけど、それだと可愛いんだよね」

「はあ」

「この前の撮影の時みたいに、かっこいい方が良いんだよ」と、小野さんはここにここに笑う。

「かっこいい、ですか」

何だか最近は、その言葉をよく耳にする気がする。

「でも、クールってどんな感じに？」

僕が尋ねると、小野さんは言った。

「だから、笑わなければ良いんだよ。見てる子は本当によく見てるからさ」

よろしく、と、小野さんは次に友一の方へ向かう。
ドラムを叩くのは、確かに楽しい。好きだし、身体全体で音を生み出す感じがしてテンションが上がる。

けれども、それがいけないなんて……。

「はあ」

思わず溜め息をつくと、キオが僕の隣へ座ってきた。

「何か言われた？」

「……うん。クールに演奏しろってさ」

「そつかあ。ボクはむしろ、もっと動きが欲しいって言われたよ」

前向きになれない僕と違つて、キオはいつもと変わらない様子だ。

「今まで、あんまり指摘してくれる人つていなかつたから、ありが

たいよね

「そう？ 僕なんて、笑うなって言われたんだよ？」

と、僕はまた溜め息をつく。

「じゃあ笑わなければ良いじゃん

「……キオ」

彼の思考回路は羨ましい。単純だし、ポジティブだし、溜め息をつく隙がない。

「楽しそうにドラムを叩く人って、素敵だけど」と、キオが前を見た。

「愛斗の場合は、笑つてると、ちょっとアホっぽいんだよね」

壁一面の大きな鏡。そこに映る僕らは、客観的だ。

「たぶん小野さんは、マナトのイメージを固定するために言つてくれたんだと思うな」

鏡に映る僕とキオ。小柄なキオと違つて、僕は普通の男だ。

「あと、MCもボクか愛斗がやるらしいね」

キオは、そう言つて笑つた。

「頑張ろうね

「……うん」

でも、本当の自分を出せないのはとても辛い。見てくれる人たちを騙すわけだし、僕はうしろめたくなる。

キオはきっと、今だけの辛抱だからとポジティブな助言をしてくれるのだろう。先が見えたから、僕は尋ねてみる。

「僕つて、どんな風に見えてるの？」

「んー」

上から下まで僕を眺め、キオは答える。

「外見だけしつかりしてて、中身は色んな意味で臆病な男の子」

キオは見事に言い当てた。薄々知っていたことを、改めてはっきりと指摘してくれた。

「……しっかり、つて？」

「だから、クールなんだよ。昔はそうでもなかつたけど、最近すご

「イケメン」

「最近？」

「たぶんだけじね」

鏡の中の自分と目を合わせれば、どこか別人を見つめているような気分になる。

「何だろ、垢抜けたって言うのかな？」

「垢抜けた……？」

「うーん、浩美に聞いたら分かりそうな気もするんだけど、何かそんな感じ」

と、キオは『まかすよ』に笑った。

「僕って、何か変わったかな？」

深夜番組が盛り上がりしている時間に、僕は純へそう尋ねた。

『何だよ、急に。変わったって言つても、どんな風に？』

「それが分からんんだよ。キオには、最近すこくイケメンって言われたけど、意味分かんないし」

すると、純は少し間を置いてから言つた。

『前にも言つたと思うけど、お前は自覚がなさすぎるんだよ』

「え？」

『お前、褒められても心の中では否定するだろ？』

「……う、そうかも」

『なのに、人の好意は絶対に無駄にしないから、流されてる』

「……うん」

『認めようぜ、そろそろ』

「何を？」

『自分が兄貴たちよりもイケてるってこと』

『あ！？ と、叫びたいのをこらえる。』

『っ、そんなことないよ』

『あるんだよ。お前は無表情で何も喋らない方が確実にモテる』

意味が分からぬ。

『そんなお前が優しくしたり、たまににじって笑うから、さりげなくてる』

「も、モテてなんか」

『それと、ついでだから言つナビ』

と、純がまた間を置く。

『オレのこともさ、本気じゃないなら振つてくれて良いんだぜ?』
返す言葉が浮かばなかつた。

本気じゃないなんて、いつ僕が言つた? それとも。

「僕のこと、嫌いになつた?」

『いや、大好きだよ。好きだから、その……』

僕だつて、純を守りたいつて思つていい。簡単に手放してはいけない人だつて、分かつてる。

『オレよりも好きな人がいるなら、それで良いから
つ、僕は純と離れたくなんかないよ。離したくない』

『愛斗』

「僕は、僕は……」

言わなきやいけない言葉があるはずなのに、なぜか声にならない。
やがて純は、静かに言つた。

『それでも、オレはお前が幸せでいてくれるなら、それだけでいい
から』

波に乗った僕たち

純からの連絡が途絶えた。メールをしても、電話をしても、反応がない。

「緊張してるの？」

楽屋からステージへ向かう途中、小野さんが僕へ声をかけた。僕はただ「はい」と、頷いただけで、頭の中では別のことしか考えられないでいた。

純の家へ行けばいいのだろうが、生憎と僕の予定は空いていなかつた。今日のライブ次第では、さうに会いに行く時間など無くなってしまうだろう。

あまりにも、純のことを想い過ぎていた。

「いらっしゃり、ギターのゆーいちです」

MCを務めるキオが上手を差す。

「で、ベースのひろ美」

ぐるりと後ろを振り返り、僕を差す。

「ドラムス、リーダーのマナトです」

僕は重たい気分のまま、彼らへ軽く頭を下げる。

「で、ヴォーカルのキオでーす」

自己紹介が終わり、簡単なトークをする仲間たちを、僕はただ冷めた目で見ていた。

音は、すでに身体が覚えている。

楽屋に戻つてからも、僕は笑えなかった。

「何か他に、問題がありそうだな」

浩美の指摘に頷きを返す。

「うん」

「何があつた？」

携帯電話を取り出して、僕は言つ。

「純と、連絡が付かないんだ。時間がないから、会こに行くこともできなくて」

無意識に溜め息がこぼれる。

「……今日、兄貴たち来てたよな」

「え、うん」

「こつちには来ないのか？」

「……分かんない」

「来るなら、それと一緒に帰ればいい」

「え？」

僕が顔を上げると、浩美は眞面目な顔で言つ。

「打ち上げなんて無視して、会いに行けつて言つてるんだ」

「……で、でも」

携帯電話に目を落とすと、楽屋の扉が開いた。

「よう、お疲れー」

「みんな、お疲れ様」

朝兄と夜兄だった。小野さんに話はしていたから、通しても「られ

たのだろう。

「おう、お久しぶりですー」

と、友一が頭を下げ、キオも「お疲れ様ですー」と、笑う。

僕の方へ来る兄たちへ、浩美は言った。

「悪いんですけど、こいつ連れて帰つてもらえませんか？ なんか、熱があるみたいで」

なんて突拍子のない。

「本当か？ それは大変だ」

「慣れない舞台で疲れちゃつた？」

朝兄と夜兄が、同時に僕の額を触るつとする。それを避けて、僕は言った。

「その、熱つてほじじゃないから」

「マネージャーには俺から話しておきます」と、浩美。

朝兄が僕を椅子から立たせ、夜兄が僕の荷物を手に取る。

「悪いな、いつも弟が迷惑かけて」

「それじゃあ、後のこととは任せたよ」

そして、僕らが楽屋を出ようと/orして、入ってきた小野さんと鉢合わせする。

「今日はお世話になりました」

「これからもよろしくお願ひします」

と、兄さんたちに促されて外へ出る僕。状況を理解していない小野さんには、すぐに浩美が声をかけていたので大丈夫だとは思うが

どうしたことか。

考えに考えて、僕は兄さんたちへ言つ。

「本当は、純と連絡が付かなくて、それがストレスになっちゃったみたいなんだ」

朝兄は言つ。

「何だつて？　どうしてずっと黙つてたんだよ」

夜兄は言つ。

「喧嘩でもしたの？　それとも、急に？」

「急に、あっちから」

俯いて、電車の到着を知らせるアナウンスを聞く。

「今から、会いに行つても良い？」

兄さんたちは悩むことなく、僕の頭をくしゃっと撫でた。

「ああ、行きたければ行つて來い」

「心配だもんね。気を付けて」

僕は頷くと、反対側のホームへ向かつ。ちゅうび、電車が到着した。

「……」

夜も遅かつたからか、純は家にいてくれた。けれども、僕を見て言葉を失う。

「どうして、電話に出てくれなかつたの？」

僕の問いに、純が唇を噛む。涙をこらえるよつた、そんな風に。「心配したんだよ」

純が、言つ。

「……ごめん。オレ、愛斗を試してた」

そして僕から視線を逸らす。いつ、背を向けられてもおかしくなかつた。

「どうして？」

「やっぱオレたち、別れよ」

答えになつていない。

「急に、何言い出すんだよ」

純の考えが読めない。僕が半歩踏み出すと、純が半歩下がる。

「だつて、オレがいたら愛斗は……」

「僕が、何？」

ふつふつと怒りのよつなものがこみ上げてくるのを感じていた。この感覚は久しぶりだ。

「オレ……嫉妬、してるんだ」

「嫉妬？ 誰に？」

「……だつてお前、きっと成功するだろ？」

と、純が寂しげな目で僕を見た。

「え？」

「音楽で成功して、きっと、遠くに行つちやうんだろ？」

純は僕に嫉妬していた。波に乗つた僕たちを。

怒りがふつと冷静になつて、僕は言つ。

「そんなこと、まだ決まつ」

「決まつてるよー」

突然、純が声を荒げた。僕はびくつとしたが、どうにかこの状況を変えたくて距離を詰める。

「浩美から全部聞いたんだ。オレは、そんなお前のやばいことの、耐えられない」

「純」

「愛斗のことは、大好きだ。でも、一緒にいたくないよ……」

「矛盾していた。

けれども、僕にとつてもそれは夢だった。仲間たちと共に追いかけると決めた、大切な夢だ。

「だから愛斗……もう、やめよう

「……嫌だ」

今にも泣き出しそうな彼を、強い力で抱き寄せる。

「つ、愛斗……」

「僕はどうちも手放せない。純が嫌でも、僕はまだ純といたい」

純の震える手が、僕の背中を掴む。

「純は嫌かもしれないし、僕を憎く想つかもしれない。でもね、純

「……」

「もつと僕に甘えて良いんだよ。頼ってくれて良いんだよ。もつと、僕に依存してよ」

「……そうしたら、離れるのが怖くなる

「離れないよ」

「い、依存したら……愛斗の、重荷になる」

「良いんだよ、それで」

「愛してる」と、わざわざく。

純が溜め息をついて、涙を流し始める。ぎゅっと僕を抱きしめて

「愛してる、愛斗。でもオレ……これから、どうしたらいい?」

「……考えよう、二人で」

僕が成功して純が傷つくなら、どうしたら傷つかないで済むのか、その方法を探すだけだ。

人生を左右する駆け引き

綺麗だと純粹だとか、そんな言葉とはほど遠い。

「だって、ドラムがサポートっていうバンドも多いでしょう？」

「で、でも、そんなのダメだ」

「……だよね」

二人同時に溜め息をつく。

「じめん、愛斗」

純が呟く。僕は肯定も否定もせず、ただ考える。

「本当にオレ、矛盾してるよな」

「……誰だって、似たようなものだよ」

矛盾するのは生きしていく上で仕方のないことだ。

「やつぱりさ、僕たちが成功しなければ良いんじゃないかな。細々と、地味に」

「……」

純が僕の目を見る。

「何？」

「……いや、成功しないようになるのって簡単じゃないと思つただけ」

そうだ。成功するかしないかなんて、僕たち自身が決められることがじゃない。ファンは勝手についてくるものだ。

「……どうしようか」

「オレ、やつぱり頑張るよ」

すっかり気分も落ち着いた様子で純が言う。

「またメンバー見つけて、もう一度頑張つてみる」

「……無理しないでね」

「うん」

ネガティブな思考は捨てるしか解決法はない。何事もポジティブ

に考えなければ、いつまでも真つ暗なまま。

「……また、負けそうになつたら」「

と、僕を見る。僕は頷いた。

「うん、ちゃんとそばにいるよ」

まるでゲーム。人生を左右する駆け引き。決して互いに影響を与えない駆け引き。

「ありがとう、愛斗」

互いの温もりだけが僕らの心を穏やかにする。きっとこれは、ただの汚れた慰め合い……。

//一アルバムの売れ行きは好調だった。

「思ったよりも売れたんで、社長も喜んでるよ」と、小野さんは言つ。

「これからはいくつかライブが続くけど、それが終わったらシングル出すからね」

僕たちがそれぞれに返事をすると、小野さんが僕を見て言つ。

「マナト君も、この前のすごく良かったよ。クールだった

「え、あ、はい」

クール、と言われて戸惑つ。

この前は、純のことしか頭になかったから楽しんで演奏が出来なかつただけなのだけれど。

「これからも、あんな感じで頼むよ」

僕は愛想笑いを返す。練習に練習を重ねたから身体が覚えていただけであつて、あの状態で慣れない曲をやつたら確實に間違える。

そんな僕の思いも知らず、小野さんは上機嫌。

「じゃ、今日はみんなに夕飯、じちそつしちゃおうかな

「え、マジですか？」

「やつた！ 小野さん、ナイス！」

「さすが、大人の男やな！」

盛り上がる三人を、僕はどこか微笑ましく思つた。

でも、キオの思考を借りるなら、僕は純のことを考えながら演奏すればいい。演奏に集中しなければ、僕はクールなのだ。
クール、という言葉は未だに僕の中ではぴたりとはまらないわけだが。

家に帰ると、兄たちが部屋でエレキギターをいじっていた。

「ただいま」

声をかけると、一人が同時に顔を上げて笑う。

「おう、おかえり」

「おかえりなさい」

何となく兄たちと話がしたい気分だったの、僕も中へ入った。

「何やつてるの？」

尋ねれば、弦を交換していた朝兄が言う。

「久しぶりに弾こうと思ったら切れたんだ」

「一年近く放置してたからね」

両親に買つてもらつたエレキギターは、一人で一つだった。だから、僕は一人が同時に演奏しているのを見たことがない。

「珍しいね」

と、一人のそばに腰を下ろす。

「今日はどうだつた？ 仕事だつたんだ？」

「うん。打ち合わせだけね」

「ご飯はちゃんと食べてきた？」

「うん、マネージャーさんが奢ってくれたんだ」

「へえ、良かつたな」

「これからが本番だもんね、頑張らないと」

「うん」

手を動かす朝兄と、それを見つめる夜兄。

僕はただ、そんな二人を見つめていた。

「兄たちも、プロになりたいって思ったことがある？」

「え？」

と、朝兄と夜兄が同時に僕の顔を見た。

僕が返事を待っていると、夜兄がにっこり笑う。

「あるよ。高校でバンドやつてた時にね」

朝兄はまた作業を始めながら、付け加えた。

「でも俺はすぐに諦めたな」

「俺は高校出るまで諦めなかつた」

と、夜兄。

「収入が不安定だと、父さんと母さんが不安がるからな」

「大学に入つて、自分に才能がないって分かつて諦めたよ」

「本当は？」

二人が戸惑う顔をした。好き勝手やつてる僕が、聞くよつなことではなかつた。

ちらつと一人が目を合わせ、朝兄が口を開く。

「俺は今ままが良い。諦めてなかつたら、お前はバンドやつてないかもしれないだろ？」

「……確かに、心残りはあるよ？　だけど、俺も今の生活が楽しいから良いんだ」

二人が優しく笑つて、呆然とする僕を引き寄せる。

「ちょ、ちょっと、何して？」

頭をぐしゃぐしゃに撫で、抵抗する僕を抑えつける。僕は誤魔化されていた。

けれども、兄さんたちが楽しそうに笑つているのを見ると、何だか胸がきゅんとなる。

あの頃に、戻つたようだった。

負けないくらいの何か

公式サイトのコーナーアルに伴い、メンバー全員がそれぞれにブログをやることになった。事務所にはすでに何通かファンレターも届いており、ブログをやることでさらにファンとの距離は縮まるという。

「ブログの名前、どうしようかなー」

最近ではブログをやらない人の方が珍しいくらいだから、当たり前のことだった。

「いくつか候補はもらつたんだろう?」

「うん。でも、最終的には自分で決めて良いよって言われたの」
公式ブログになると、まずそれを用意するにも時間がかかるもので、初めにキオのブログが開設されることになった。

「好きな言葉を組み合わせた方が良いかなあ、とは思つんだけど」と、キオが唸る。適当でも構わないと小野さんは言つたが、やはりタイトルは重要だ。

「白っぽい背景で文字がピンクとか青だから、なんかそういう感じのが良い」

「アドバイスしようにも分かりにくいわ」

友一の突つ込みにキオが笑う。

「だよねえ。うーん、どうしよう?」「

僕は何も言わず、ただ別のことを考えていた。

「そうだ、ボクってどんなイメージ?」

「チビ」

「ガキ」

「そうじゃなくてー」

届いたファンレターのほとんどがキオ宛だったからか、浩美と友一はやる気をなくしていた。ヴォーカルはどうしたって目立つし、

人気が出るのも仕方がない。

「もつとこう、カワイイ！とか、抱きしめたい！とか」

「あんまり調子に乗りすぎると怒るぞ」

と、浩美が言い、キオが首を傾げる。

「誰が？」

「友一が」

「俺のことかい！浩美も調子乗つてるんじゃないかな？ああ？」
でも、事務所の狙い通りに僕にもファンが付き始めていた。早く
も、惚れられてしまつたし。

「やっぱ、カラフルわたあめにしようかなあ」

浩美と友一が口喧嘩するのにも構わず、キオが言つ。

「ふわふわでいろんな色がある感じ。どう思つ？ 愛斗」

「え？……う、うん、良いと思つよ」

とつさに相づちを打つたものの、キオは僕の考えを見抜いて笑う。

「じゃあ、決定ね」

あれから一週間。

純はまだバンドメンバーを見つけ出せずにいた。知り合いを紹介
しようかと言つたが、断られてしまった。自分の力でやりたいから、
と。

僕はそんな彼をずっと心配していたが、仕事の時は仕事に集中し
なければならない。

ストレスは確実に溜まっていた。

ライブをいくつかこなす内に、僕らはそれに気づき始める。

「マイク……買いたいな」

「もつと、他の弦も試してみたいな」

「俺も、ちょっと見直そつかな」

「ペダル、やっぱり変えとけば良かつた」

それまで知っていた場所とは、大きく違うステージ。自分たちの

所有している機材が少ないだけに、せめて他のバンドに負けないくらいの何かが欲しい。

「実力もそうだけど、使う物によつても変わつてぐるからね」

小野さんの言葉に、僕らは頷く。

メジャーで活躍するミュー・ジシャンたちから、もつとこうんなことを学んで、他の仲間たちからも情報をもらつて。

「焦ることなによ。君たちは、これからなんだから」「はい」

今ままでは、いけない。この先へは、行けない。

音楽活動に専念するため、僕はアルバイトを辞めた。

浩美もキオも、友一も近いうちに辞めるといつ。

お金は確かに大切だが、僕らは今、岐路に立たされている。この先に、目指すものがあると信じて、僕らはその道を選ぶ。

慣れなければいけないこと

キオのブログが出来上がり、次に友一と僕のブログが開設された。

「……何で俺が最後なんだ？」

「だつてお前、ベースやもん」

「普通、ドラムが最後だろ？」

「だつてマナトは俺らのリーダー、核やもん」

携帯電話のボタンをぶちぶちと押しながら、友一は楽しそうに記

事を書いている。

「う、ごめんね？」

思わず僕が謝ると、浩美は溜め息をついた。

「ふん、別にいいさ。俺にもファンレター届いたしな」と、友一へそれを見せびらかす。

「な、ムカつく奴やなあ。たつた一通だけやろー？」

「そういうお前はまだゼロだろ」

「でも読者の数はすでに二桁越えたで」

「えー？」

反応したキオが目を丸くして友一を見る。

「何や、どうした？」

自慢げにキオを見る友一。

キオは自分の携帯電話に目を落として言つ。

「二桁は当たり前だと思つてた……」

「何やとー？」

今度は友一が大きな声を出した。その横で浩美が笑い声を漏らす。「わ、笑うな！ まだ出来上がって三日やぞ？ これからやー！」

「そうだな、せいぜい頑張れ」

「そういえば、愛斗は？ もう記事書いた？」

「え、うん……一応、一日一回は書いてるけど」

僕はあまりインターネットに依存していないおかげで、記事の書き方がよく分からなかつた。

「どんな風に書いてるの？」

と、キオが僕の方へ寄つてくる。携帯電話を取りだし、送信ボタンを聞く。

「えつと、こんな感じ……」

昨日ブログに載せた文章をキオへ見せると、浩美と友一までのぞき込んできた。

「今日はスタジオでした。その後、仲間たちと食事をして解散読み上げたキオが、三人を代表して言つ。

「みじかっ」

「え、そうなの？」

ブログは日記みたいなものだから、それくらいで良いのだと思つていたのだけれど、違うのか？

「俺の見てみー、ほら」

と、友一が携帯電話の画面を僕へ見せる。

そこに書かれていたのは、スタジオで浩美がトラップって大変だつた、とか、みんなで食べた料理が美味かつた、とか、そういうた詳細ばかりだ。そしてそれは友一流にアレンジされていて、とても面白い。

「……こ、こんなにすごい文章、僕には書けないよ」

「でも、読んでくれる人を思うと、これくらい普通だよー」

と、キオ。

「そうかもしれないけど……」

ブログなんてやつたことないから、全く分からぬ。

「まあ、お前の場合はクールで通つてるから良いんじゃないかな？」

と、浩美。

「友一みたいに書いたら、キャラが崩壊するぞ」

「あ、そうだね」

そういえばそうでした。

「普段の愛斗をそのままさらけ出したら幻滅だよねえ」

「げ、幻滅つて……」

さすがに言こすぞだと思ひ。

「確かにそりやな。今のちよつと堅いへりの書き方がちょっと違えのかもな」

結論、無理して読者を意識する」とはない。僕はクールを演じればいい。

「けど、たまには別の一面も見せなきゃね」

と、キオは僕の肩に腕を回すと、右手に持った携帯電話を掲げた。僕が戸惑っている内に、カシャッと音が鳴る。

「え？」

[写真？]

「ブログに載せるんだよー。今日は打ち合わせで、マナトくんがまたまた隣にいたので撮ってみましたー、って」

僕は目を丸くした。あの、どういふことですか？

「そういうや、他の人もやってたな。おし、俺とも撮ろうや」と、今度は友一が僕の隣へ来る。

「え、ちょ……」

再び電子音。

「よつしや。きつと見てくれてる人らが喜ぶでー」

僕は何が何だか分からなかつた。だって、ブログは日記みたいな物だよね？

頭を悩ませる僕を見て、浩美が言った。

「どうした？」

「え、いや、あの……えっと、[写真つて、ブログに載せられるの？..

三人が固まつた。

「だ、だって、ブログつて日記だよね？」

三人が気まずそうに顔を合わせる。いくつかひそひそ話をした後、それぞれに口を開いた。

「愛斗、インターネットとかウェブは分かるよね？」

「う、うん。あんまりやらないけど」

「携帯電話にカメラ機能があるのは知ってるな?」

「もちろん」

「で、ブログに写真を載せるのは今では主流なんや」

「……?」

「だからね、載せられるの」

「文章だけでも良いが、写真があると分かりやすいだろ?」

「それに、写真があるとめつとおもしろいブログになる」

「そ、なんだ……」

知らなかつた。

「マナトがまさかインターネットに疎いなんて、ブログに書けないよ」

「まあ、良い勉強になつたな」

「素のマナトは、ほんまにアホなだけやな」

何だか申し訳ない気持ちになつてきた。別に機械が苦手とか、そういうことはないのだけれど、どうも僕はテレビの方が好きだし、暇な時はドラムの練習に当ててしまつ。携帯電話でウェブなんてお金がかかるだけだから全然見ないし、パソコンは兄さんたちと共有しているので必要なことしかやらないのだ。

「…………」めん

どうやら、僕にはもっと他に慣れなければいけないことがあるようだ。

加えられた過剰な演出

「……この前も、そんな顔してた」

「え？」

隣に寝転んだ純を見る。

「愛斗、疲れてるんじゃないのか？」

僕は天井を見上げて答える。

「うん、そうかも」

純と会うのは週に一度のこの時間だけ。翌日が休みなら純の部屋に泊まっていくけれど、仕事があるとそういうかない。

「何か、違う意味で不安」

「違う意味って？」

『じろりと寝返りを打つて』
「愛斗が壊れないか、とか」

僕は笑った。

「壊れないよ、僕は」

と、純の髪の毛に触れる。

「純と違つて弱くないもの」

「……うん」

僕に背を向けた純は小さかつた。

「大丈夫だよ、純。安心して」

声をかけても、『届かない』

「オレ、準備は出来るから」

と、また弱気なことを言つ。

「……純、僕は準備できていよい

だから離さない。

「……うん」

純を、独りぼっちになんかさせないよ。

季節に流された訳じゃないけれど、気づくと木枯らしが吹いていた。もうすぐ冬だ。

「クリスマスライブ、出るからね」と、小野さんは言つ。

「え、本當ですか？」

「うん。レーベル主催のイベントでね、まだ詳しいことは決まってないけど、きっと良いライブになるよ」

「クリスマス……メリークリスマース！」

「キオ、落ち着け」

「にしても、面白そうやなあ。わくわくしてきたで」

「うん、そうだね」

クリスマスライブに出るのは初めてだった。まだ結成して一年も経っていないから、当たり前か。

「その代わり、年末年始はお休みだよ」と、小野さん。

僕らは着実に人気を集めていた。浩美のブログも来週には用意できるらしく、レーベルに所属して初めて出したシングルの評判もそこそこ良い。

「来年はセカンドシングルから始めるよ。お正月のんびりしそぎて、氣を抜かないようにね」

「はーい」

「で、最近の予定は？」

「明後日、雑誌の取材だね。撮影もあるからひとりとするよ」

「了解」

「後は……あ、日曜なんだけど、キオとマナトの二人に取材

「またですか」

「今のところ人気の一人ばっかしや」

と、文句する浩美と友一。

「仕方ないでしょ。その内に単独インタビューとか入るから、我慢

して

と、小野さんは一人へ笑う。

安易に信じるものではないが、それでも僕らが波に乗っているのは確かだった。一年後には、ワンマンライブだって出来るかもしない。

「マナトには彼氏がいるってお聞きしましたが？」

「ああ、はい、います」

公式サイトのプロフィールには、なぜか恋人の有無が書かれていた。もちろん、僕には彼氏がいる設定だ。……実際にいるけど。「詳しく聞かせてもらつても良いですか？」

「えーと……」

僕は困った。隣に座るキオに目をやつて、助けを求める。しかしキオは言った。

「この人の彼氏、可愛い人なんですよー」

「えっ」

「会つたことあるんですか？」

「もちろん。っていうか……」

と、僕に目を向けるキオ。言つてしまえ、という視線だった。

「……べ、別に普通の人です。一般の人ですよ」

「ああ、そうなんですか。では、キオは？」

「えー、公式で不明つてなつてるから答えられないなあ

「ですよねー」

キオはその性格のためか、記者とすぐに意気投合してしまう。羨ましい限りだ。

「じゃあ、どんな人が好みですか？」

「んー、しつかりしてる人かな。ボクがこんな性格なんで、突っ込んでくれる人が良いです」

「確かに止めてくれる人がないとダメだよね、キオの場合」と、僕。

「これでも普通でいるつもりなんだけどねえ」

そう言つてキオが苦笑する。

「普段は誰が突っ込み役なんですか？」

「え、どうだろ？」

「うーん……僕かな？ 友一の暴走は浩美の担当だし」

「あれはただ喧嘩してるだけだよー。あの二人は喧嘩するほど仲が良いから」

「そうだね。となると、やつぱり僕でしょうか」

「なるほど」

「ステージでは後ろにいるんで、あんまり突っ込めないんですけどね」

ブログは便利なのだけど、どこかでとんでもない情報を得てくるファンもいる。

「キオとマナトが『キてる』？」

「これ、見て」

と、僕はこの前の取材が載った雑誌を開く。

「この部分だと思うんだけど」

指さした箇所を小野さんたちが読む。これまでにも出来上がったものが予想と違っていたことはあつたが、今回ばかりはスルーできない。

「お前ら……そーゆー関係にしか見えへんなあ」
友一の言つとおりだった。

加えられた過剰な演出を真に受けると、僕もキオも恋人同士にしか見えなかつた。

「この記者、腐女子なんじやないか？」

と、呆れて浩美が言う。

「どうしたらしいですか？」

僕とキオが困惑した目を向けると、小野さんは言つた。

「キスしちゃえば良いじゃない」

「え？」

「は？」

「何事も前向きに考えなくちゃ。だって、キオは恋人がいるか分からないんだし、マナトには彼氏がいる。で、キオは男」呆然とした。

「まあ、嫌ならただの噂で留めておいても良いし、ヴォーカルとドラムがデキてるってのも面白いと思うけどね」

と、おかしそうに笑う。……そういう問題なのか？

「……マナト」

と、キオが上目遣いにきゅっと僕の袖を掴む。

「ちょ、何してるの」

すぐに僕は嫌がつて振り払う。キオと恋人同士なんて、キャラでも受け入れがたかった。

突然な言葉

純はやつぱり、僕とキオが『テキてるなんて聞いたら嫉妬するだろ
う。

「最近、どう?」

「うーん、忙しいかな」

「給料つて、いくらぐらこもらってるの?」

「え?僕は曲作ってないから、そんなにもうえないよ。あ、
でも取材はよく受けけるから多いのかな」
細かいことはあまり気にしないので、誰よりも多いとか考えたこと
もなかった。

「そつか

純は笑ってくれる。

なるべく彼を心配させないよう、不安にさせないよう、僕
は余計なことを言わないことにしていた。

「おかえり、遅かつたね」

「うん、ただいま」

帰宅したのは、夜中の十一時を過ぎた頃だった。

「また純くん?」

「うん」

待つていてくれていた夜兄へ適当に返事を返し、僕は自分の部屋
へ向かう。

「お風呂は?」

「明日、シャワー浴びてくよ」

夜兄には悪かつたけれど、僕は相手をする気になれなかつた。

「そう。おやすみ.....」

「うん」

僕は疲れていた。

翌朝、僕は少し寝坊した。急げば特に問題などない十分程度の寝坊だった。

「おはよう、愛斗」

「おはよう、兄さん」

慌ててシャワーを浴びてきた僕は、髪の毛が濡れたまま部屋へ鞄を取りに向かう。

「ずいぶん急いでるな、あいつ」

「寝坊したんだって」

朝兄と夜兄の会話を背に、あれやこれやと持ち物を確認する。そうだ、今日は夕方から知り合いのライブに行く予定だった。その後はたぶん、別の知り合いと飲み会だ。

「今日は友達と飲みに行くから、遅くなる」

そう言いながら居間へ戻り、夜兄の用意してくれた朝食にがつつく。

「うん、分かった」

と、夜兄は相変わらずのんびりと食事をする。

今はまだ人気がそんなにないからマイチだが、浩美と友一はすでに自分のピックを作つてもらっていた。僕もその内にファンへ物を投げなければならなくなるのだろう。他人のライブを観ていると、本当にそう思う。

朝兄と夜兄がちらつと目を合わせた。

「なあ、愛斗」

「何？」

目を上げると、朝兄が僕をじっと見つめていた。

「俺、実は一ヶ月前から付き合ってる子がいるんだ

「え？」

意味が分からなかつた。何で、わざわざ僕に言つのだろう？

「同棲も考えてる」

「……へえ、良かつたね」

兄さんが幸せになれるなら、良いと思った。

すると、今度は夜兄が口を開く。

「三人で暮らすのも良いけど、俺も実家に戻ろうと思つんだ」「は？」

さらに意味が分からぬ。

「契約切れるまで、ここにいるつもりだけどね」

「……そ、そう」

二人が何を言いたいのか、全く分からなかつた。唐突すぎて、考えがまとまらない。

沈黙が続き、僕は先に席を立つ。

「じちそうさま」

食器を流しに持つて行き、洗面所へ向かう。髪を乾かさなければならぬと思つた。

「愛斗」

途中で朝兄が僕を呼び止める。

「お前も、もう一人で暮らして良いぞ」

「……」

あまりにも、突然な言葉だつた。

家を出てからも、僕はずつと考えていた。

僕を一人にさせてくれない兄たちが、突然離れたがるなんて。それどころか、一人暮らししても良いなんて……信じられない。まったく意味が分からなかつた。

「今さら?」

「だつてそれしかないだろ?」

浩美に聞き返されてしまい、僕は戸惑う。

「でも、突然すぎるつてゆーか、何ていうか……」

確かに、僕はこの時をずっと待ち望んできたわけだけど、いざ訪れてしまつと変な気分だ。

「良かつたじやないか、晴れて自由の身だぞ」

「うーん……そななんだけど、納得いかない」

ようやく『弟離れ』してくれたのは素直にありがたいとしても、やはり突然すぎる。

「あっちから言つてきたんだから、お前が悩むことないんじやないか?」

と、浩美は言つ。

「分かつてる。けど……」

突き放されたような気がして、これまでずっとそばにいたのに、繋いでいた手を突然離されたような、寂しさ。

浩美は溜め息をつくと、俯く僕の頭に手を載せた。

「今は仕事だ。余計なことは考えないで集中しろ」

「…………うん」

と、僕は浩美の手を避けた。

昼食を終えた頃、純から電話がかかってきた。明るい内に電話が来るのは珍しい。

「どうしたの?」

僕が尋ねると、間髪入れずに純が言つ。

『メンバーが決まった! これで、また活動できるー。』

喜びの報告だった。僕も嬉しくなって、彼へ言つ。

「良かつたね、純」

『うん！ 愛斗が励ましてくれたおかげだよー マジありがとー』

！』

次に会つ時はお祝いとしてケーキでも買つてこいつかと思つ。

『あ、もしかして仕事中だった？』

ふと我に返つた純がいつもの調子で尋ねる。

『ううん、今は休憩中だから大丈夫だよ』

『そとか……つい、嬉しくなっちゃつてさ。無にじめんな

「気にしないで。僕も気になつてたことだし、良い報告が聞けて嬉しいよ』

『うん。ありがとう、愛斗』

『いえいえ。これから、お互に頑張りましょ』

『うん……愛してる、愛斗』

自然と僕も微笑んで、言つ。

「僕もだよ、純」

それから純が『今日は、これから何するの？』と、聞いてくる。
『二時まで打ち合わせ。ひたすら話し合つだよ』

『大変そうだな』

「体力使わないから楽だけど、やっぱ疲れちゃうね。その後は時間を潰して、ライブに招待されたからみんなで行つてくる

『そつか。……がんばれよ、愛斗』

『うん。純も』

『……おう。それじゃあ、またな』

通話が切れると、僕は息をついた。携帯電話を閉じて、考える。

「誰と話してたの？」

突然声をかけられて、びくつとした。

「お、小野さん……」

いつの間にか小野さんが、にっこり笑つて僕の隣へ来ていた。

「午前中は元気なさそうに見えたけど、今は元気そうだね」

「……はい、まあ」

携帯電話をポケットへしまい、僕は前を見る。

「何か良いことあった？」

「はい。心配事がひとつ、解消されたので」

「いつものようにさう言って僕は笑う。他にも心配事はあったけれど、今は嬉しい。」

小野さんは僕の様子をじっと見て、言った。

「さつき話してたの、彼氏でしょ？」

「え？」

「ギックとした。悟られてやいないかと心配になるのも一瞬で、そんな僕に構わず小野さんは言つ。

「ちよつとだけ、聞こえちゃつた」

悪気はなかつたらしく、少し申し訳なさそうにする小野さん。でも、浩美にキャラを貫けつて言われているだけに、不安だつたりもする。

「ま、別に何かしたいって訳じゃないから気にしないで」

「……はあ」

とりあえずは、信用することにする。相手はマネージャーだし、こんな小さなことで壁を作るのも嫌だったから。

劣等感に追い打ち

純が新しいバンドで初めてのライブをした日、初めて僕はステージに立つ純を見た。クリスマスまであと一ヶ月のことだった。

「良かったよ、純。すごくかっこよかった」

他人のライブを見るのはやっぱり好きだ。

「愛斗、今日はスタジオつて……」

目を丸くする純へ僕は言つ。

「個人練習だから、さつさと引き揚げてきたんだ」

「ああ……そつか、見てたのか」と、純は照れくさそうに俯く。

「お疲れ様」

「こいつと微笑めば、純もまたにっこり笑う。

「愛斗も、お疲れ」

他人のライブを見るのはやっぱり好きだ、色々な事を学べるし、気付けるし、自分の劣等感に追い打ちすらかける。

そんな複雑に絡み合う感情の中で、僕はただ彼を見つめていた。

朝兄があまり家に帰らなくなっていた。彼女がいるというのはどうやら事実のようで、ホテルや彼女の家に泊まることが増えた。

一方の夜兄は相変わらず家にいて、仕事をしたり、家事をしたりする。片方がいないだけで、その毎日は忙しくなっていた。

僕は相変わらず音楽活動と家の往復で、たまに純の部屋に泊まる。変わったことといえば、純との触れ合いが減ってきた、ということくらいが。

「ねえ、兄さん」

部屋で仕事をしている夜兄に声をかける。

「何?」

手を止めて、振り向く。

僕は扉のところに突っ立つたまま、問う。

「兄さんは、彼女とか、いないの？」

夜兄は笑った。

「いよいよ。第一、出逢いがないもの。朝田と違つて周りにいるのは、おじさんにおばさんに子どもたち」

「……そうだね」

職場では最年少の夜兄だ。聞かなくても分かることだつた。

「朝兄、結婚するのかな」

本当に聞きたかった事を口にすると、夜兄が僕をじつと見つめた。

「すると思うよ。来年か、再来年には」

「夜兄は？」

「俺は……まだ結婚したいと思わないね。いろいろ問題もあるし」

「問題つて？」

尋ねると、夜兄が僕に背を向けた。

「愛斗には関係ないよ。明日も早いんでしょ？ もう十一時だよ」
答えてくれなかつた。誤魔化そうともせず、僕には関係のないことをだと言いきる。

僕はそんな兄さんの背中をしばらく見つめて、部屋を出た。

「おやすみ」

何かがおかしくなつていた。それは確かに感じるし、頭でも理解している。それなのに、何がきっかけでこうなつたのか分からなくて、もやもやしていた。

クリスマスライブ前の、最後のライブで僕たちは現実を目の当たりにする。

キラキラした瞳で前方をじっと見つめる女の子たち。たまに男子。

「ここって、キヤパ何人だっけ？」

「三百五十くらいじゃなかつたか」

浩美にそう返されて、キオがうわあと声を上げる。僕も同じ気持ちだ、まったく信じられなかつた。

「怖じ気づいてどうするん、テンション上がるやんか！」

と、友一。そう、これは僕たち自身が望んだ場所。

「そうだよね。緊張するけど、頑張ろっ」

手にしたステイックを握りしめて、僕は三人を見た。みんながそれぞれに頷いて、呼吸をする。

ステージへ上ると、僕は思いきりドラムを叩いた。クールというのもだいぶ板について、笑わなければ許されることが分かつてきた。純のことを想えない時は、緊張すればいい。

浩美のベースと音を重ねて、友一のギターがメロディを乗せていく。キオが歌い始めると、オーディエンスはさらに沸いた。自分たちが音に飲み込まれていくのを感じながら、その一方で盛り上がるみんなを見て、妙な心地よさを覚えた。

三日ぶりに顔を合わせた朝兄は、唐突に僕へ尋ねた。
「お前たち、うまくやれてるのか?」

「え?」

何のことだか分からなくて、田を丸くしてしまう。
「純くんとだよ」

と、朝兄は笑う。

僕は納得すると、少し考えてから答えた。

「まあまあ、かな」

どうもタイミングが合わなくて、純がしたがる時に僕がそれを拒んでしまうほどのすれ違いが何度かあった。それでも純は僕を好きでいてくれているし、別れ話もしなくなつた。

「近くに越さないのか?」

「え?」

「または、一緒に暮らすとか」

朝兄は僕を一人暮らしさせたい様子だった。

「まだ分からないよ。純とも、ずっと一緒にと思えないし」
素直なことを言うと、兄さんが田を丸くした。

「別れるのか」

「あ、いや、その……」

兄さんが悲しそうな顔をするので、僕は困つてしまつ。

「ちょっと、自信がなくなつてただけだよ。どうなるかは分からな

い

「……そつか」

朝兄はすると、欠伸をしながら台所へ向かつた。

別に、純のことが嫌いになつたわけではない。ただ、愛している
ところ自信を僕はいつの間にか喪失していた。付き合いが長すぎて、

倦怠期が来ただけなら良いのだけれど。

「倦怠期を乗り越えることは、普段と違うことをするのが良いらしい。
「……お、オレ、もうちょっとお洒落すれば良かつたかな
待ち合わせ場所へ来た純は、僕を見てすぐにそう言った。
「別に構わないよ。純らしくて良いし」

そう返せば、純が「そうだな」と、頷く。

今日は久しぶりに屋外で会っていた。一人の好きなお店を回って、
いつもと違うところで食事をすれば、今の関係も回復する気がして
いた。

「どこか行きたい場所ある?」

「え、うーん……あ、オレ、服見たい。コートが無くってさ
と、純。

「前まで使つてた奴は?」

「うん、近所の猫に破かれた」

落ち込む様子で言った純を見て、僕は笑う。

「猫じゃあ、しちゃうがないね」

「あれ、結構気に入つてたんだぜ」

と、純。

「そうなの? ジャあ僕が新しいの買つてあげるよ
「え、何で?」

歩き出しながら僕は言つ。

「いつもご飯、ごちそうになつてるから」

僕の隣を歩く純が、恥ずかしそうに俯いた。

「あ、あんなの大したことじゃないけど……ありがとう
街はクリスマスカラーに染まっていた。

夜兄は言つ。

「朝日から、何か聞いた?」

「ううん、特に何も」

「……どうしようかな」

部屋で寝ている朝兄を気にするよう、夜兄が言つ。

「俺が話しても良いのかな」

僕に対しても良し事があるようだつた。

少し怯えながら、ドキドキしながら、変な期待をしながら待つて
いると、夜兄が椅子を立つた。

「愛斗、純くんとはいつもどこに行つてる?」

「え? 外に出ることはそんなにないけど、あるとしたら渋谷か、
新宿辺りかな」

ライブハウスの多い地域には自然と足が向く。

「朝日だけじゃなくて、俺もそんなんだけさ」

と、夜兄はカップを一つ取り出して、お湯を注ぎ入れる。

「愛斗に離れてもらいたくなくて、いろいろ調べたんだよ

「調べたって、何を?」

取り出した紅茶のティーバッグを一つのカップに入れて、兄さんが言つ。

「同性愛のこと」

胸がすきんと痛んだ。

「愛斗がどうしてそうなったのかは分からぬけどさ、自分とは違うものを受け入れるのって辛いんだよね」

もう一つのカップにティーバッグを移す。

「最初は気にしないつもりでいたけど、朝日はまた新しい女の子に恋をして」

ティーバッグを揺らし、カップの外へ出す。

「愛斗のこと、どうしていいか分からなくなっちゃつたんだつて
砂糖をカップに入れて、スプーンで混ぜる。

僕は夜兄から顔を逸らしていた。

「正直に言つと、俺もどうしたら良いか悩んでる」と、夜兄がカップを僕の目の前に置いた。

紅茶の甘い匂いが立ちこめて、僕はじつとその水面を見つめる。

「愛斗は将来、どうなるの？」

と、夜兄が向かいに座つて僕を見る。

「純くんと別れて別の男性と付き合ひのか、女の子と付き合つて家庭を持つのか」

「……分からぬ」

「この前のデートで、結局僕は純とキスをした。

「純くんとは、どこまでいってるの？」

「やれることは、全部……」

僕の答えに夜兄が「うん、そうだよね」と、納得する。
人通りのない陰で二つそり交わしたキスは、僕が僕を明確にするのに十分すぎた。

「別にどっちがどっちでも構わないけど、想像はしたくないよね」「……」

僕は彼を知りすぎた。そうすることが自分を支えるだけだと知りながら、彼のいない生活は考えられなくなつていた。

「愛斗は、俺たちが思つほど普通の子じやなかつた

「……え？」

少し目を上げると、夜兄は紅茶を一口飲んでから言った。

「愛斗は遠いよ。俺たちには遠すぎる場所まで行つてしまつた」

もう追いつけない、と夜兄は言つ。

「俺たちが先を行つていたはずなのに、いつの間にか越されてた」

それは純のことだけではなく、音楽のことも言つっていた。

「気づくのが遅くて、ごめんね」

夜兄が優しく笑う。

僕は、遠いところになんかいなくて。それどころか、みんなに置いて行かれている気分で。

そばにいるはずの純を、確かめた。

矛盾している。

「……愛斗、馬鹿なの？」

「え？」

振り返ると、純は僕にしがみついてきた。

「だつて、来るなり抱きしめて、キスして……馬鹿みたいだ」

僕はようやく我に返った。兄さんの顔から逃げ出して、僕は純を感情のままに求めていた。

「……うん、ごめん」

醒めた素肌に冷気が当たつて少し寒い。

「何があつた？」

僕を見下ろす純へ、僕は何でもないと言いかけてやめた。声が震えていた。

「……愛斗」

キスをして僕の唇を塞ぐ。その熱さに少し溺れるだけで、僕は現実に向き合える。

「兄さんと、喧嘩した」

「どうして？」

田を丸くする純を胸に抱き、僕は言つ。

「本当はちつとも分かり合えてなかつた。僕が、兄さんたちのことを見分かつていなかつたんだ」

「……うん」

「甘えてた。朝兄も夜兄も、ずっと僕の味方だと思ってた」
けれどもそうじゃなかつた。一人は気づかぬうちに、僕から離れていたんだ。それが目に見えるようになったのが、つい最近だつただけ。

「僕はもう何ヶ月も前から、一人だつたんだ」

純が優しく僕の心臓に口づける。

「オレがいる」

「うん……、純しかいなかつた」

初めの目的はとっくのとうに達成していた。それに僕が気がついて、一人暮らしをしたいと言えれば、きっとそれで終わっていた。「二人には、本当に悪いことをした……」

「……」

「だけど、純」

声がまた震える。

「僕はまだ、純に縋り付いてる」

「うん」

情けなくて涙があふれた。純は何も言わずに、僕の涙を舌ですくう。

「オレだつて縋り付いてるよ」

もう何もかもが今更だつた。あの頃には戻れないし、仲の良かつた兄弟には一度となれない。

「愛斗は優しすぎるんだ。無理して分かんつてしまなくて良いの」と、元気で笑う。

「……」

「余計なことまで抱え込んで、悩んで、泣いてる」

「……うん」

僕はまだ若かった。

「本当にオレのこと、好き?」

「……」

僕はまだ何も知らなくて、僕よりも何かを知っている純の目が、怖かった。

「愛してる?」

「……」

僕はまだ全然垢抜けてなどいなくて、子どもで、青臭くて。

「オレのことが本気で好きなら、そばにいて」

「……」

「本気じやないって気づいたなら、もう終わりにしてよ
僕はまた涙を溢れさせた。寂しかった、怖かった。
「でもオレは、愛斗がこの世で一番の男だって思ってる。……理想、
なんだ」

もう誰にも置いて行かれたくなくて、僕は純を強く抱きしめた。
向き合ひべきは純ではなくて、自分自身の気持ちだった。

もっと自分を知ること

風邪だと嘘をついて打ち合わせを欠席した。

一人きりのＬＤＫは広すぎて、僕は帰ってきたことを後悔した。でも、純の部屋に居続けるのも苦痛だった。

十一月は寒くて、カレンダーはクリスマスまでの日数を確実に数えている。

何かを食べる気も起きなくて、僕はただベッドに寝そべって、毛布の温もりに身を任せていた。

純は、きっと気づいていたんだろう。僕が純の想いを真に受け、求められるまま行動していたことに。

兄さんは、朝兄と夜兄は、きっと僕を今までと変わらずに愛そうしてくれた。けれども壁は越えられず、僕から離れて行ってしまった。

人知れず、一人は悩んでいたのだろう。僕が純と遊んでいる間に、二人は。

溜め息が零れた。その音に自分でもびっくりして、はっと気づく。携帯電話のライトが光っていた。手を伸ばして取り上げ、画面を開く。浩美からメールが来ていた。

今日の打ち合わせの内容と、クリスマスライブの概要、それと見舞いの言葉で文章は終わっていた。

「……ああ」

僕は最低だ、最低で最悪の男だ。

向き合つべき僕は、まだ迷っていた。兄さんたちに対する想いとか、純に対する想いとか。夢に対する、情熱とか。

答えはきっと分かつていて、僕はまだ欠けたピースを自分が隠していることに気づかない。まるで道化だ。

純はそれでも、僕のことを好きだと言つて抱きしめてくれるのだ

わづ。何故かその温もりが、今では恋しい。

浩美はふと真面目な顔になつて言つた。

「俺が、お前のことを本氣で好きだつて言つたら、どうする?」

「田を丸くする僕だったが、その手にはのらない。普通に断るよ。急に言われても困るし」

すると不満そうな顔で浩美が言つ。

「何だよ、お前。つれねえな」

「……あれから半年近く経つてるから

と、僕。

「まあ、そうだな。で? お前はどうしたいんだ?」

と、浩美が溜め息混じりに問つ。

「うん、とりあえず全部白状したい」

「でも怖くて出来ない」と

「……うん」

情けないけれど、それは本当のことだつた。

「あいつは?」

「……別れるよ、たぶん」

浩美がまた溜め息をつく。

「ついに、だな。ま、純には束の間の幸せだつたわけだ」

「……」

「あいつのことだから許してくれるだろうが、お前はそれを学んでもつと自分を知ることだな」

下がった頭が上がらなかつた。

「もし、今度別の男にしつこく言へ寄られても断れよ

「う、うん」

「女の場合もそうだ。一ケ月やそこいらで別れるような女は信用するな」

好みにはまつていて、ちょっとでも気が合つない良こと思つのだ

けれど、浩美は真面目だ。

「この際だからはつきり言つが、お前は流されやすいんだよ」

「……うん」

自覚していたつもりだったが、改めて言われると痛い。
「だから長続きしないんだろう。純とは何ヶ月だ？」

「え、えっと……六ヶ月、かな。最長記録だよ」

僕が言つと、浩美は先ほどよりも深く溜め息をついた。

「それとな、お前は能天氣すぎるんだよ。たまには深く考えたり、
断るつてことをしろ」

「う、はい……」

「性欲処理の相手が必要なのはよく分かる。だが我慢しろ、したければ一人で勝手にしろ」

そう、言つてしまえば僕は純を性欲のはけ口にしていたも同然で。
「一人でいるのが寂しくても耐える。お前は一人に慣れるべきだ」
浩美の言つことはすべて図星だった。

「弟離れして欲しいと言つたのはお前だろ？ それなのに、結局お前は一人じゃ何も出来なかつた」

「うん……」

「あの二人には感謝するんだな」

そう、僕は兄さんたちに感謝しなくてはならない。
「今の自分があるのは彼らのおかげだ」

「僕もそう思う」

「じゃあ、帰つて素直に謝れ。そして感謝しろ」

「うん」

そうするしかないのは分かつていた。ただ、少し勇気が足りない。

「……愛斗さえ良ければ、ルームシェアでもしよう」

「え？」

「事務所の近くに引っ越すと想つんだ。このタイミングだから、ついでにどうだ？」

「浩美が僕を見る。」

「あ、えっと……兄さんたちに相談してみるよ」

「馬鹿。それがダメなんだろうが」

「え?」

首を傾げると、浩美がはつきりと言つ。

「お前はな、兄貴たちに甘えてるんだよ。先に離れるべきなのはお前だつたんだ」

ドキッとした。そういえば、そうだ。僕はいつも、何かあるとすぐ兄さんたちを言い訳にしていた。あの一人は「プログラミングだから」と。

「甘えるのもいい加減にしろよ、愛斗」

浩美は大人だ。

「うん……うん」

僕は頷いた。覚悟を決めて、一つ息をつく。

「つてゆーか浩美つてさ、僕のこと、よく分かってるよね」と、話題を変える。僕の知らない僕すら見透かされている気分だった。

浩美は「そりゃ分かるさ」と、言つ。

「もう三年も、ずっと一緒にいるんだからな」

いつものように、呆れたように微笑む浩美。

「……………」

と、僕は視線を逸らす。こんなことを、僕たちは何回だつて繰り返してきた。基本的に相談するのは僕だつたが、浩美はいつだつて僕の話を聞いて、最後は的確なアドバイスをくれる。

その距離感が心地良くて、キオや友一には話せないことすら浩美には言つてしまつ。浩美はそんな僕に呆れながら、何だかんだでそばにいてくれる。それはきっと、これからも。

「ありがと、浩美」

浩美は、何も言わずに僕を見ていた。

ライブまであと一週間だつた。

「ただいま」

帰宅すると、玄関には一人の靴が並んでいた。今日は朝兄も帰っているらしい。

「おかえりー」

と、夜兄の声がして、僕はちょっと安心する。

居間へ向かうと、兄一人がテレビを見ながらくつろいでいた。

「おかえり」

と、朝兄が振り返る。

「うん、ただいま」

僕はそう返し、自室へドアと鞄を放る。自分の場所に腰を下ろして、僕は言つ。

「純と、別れようと思うんだ」

一人が同時に僕を見た。

「本当は僕、純のことは本気じゃなかつたんだ。でも、好きだつた」一人はあからさまに戸惑いを見せ、朝兄は俯き、夜兄がテレビの電源を消す。

「僕はただ、兄さんたちに離れてもらいたくて純とつきあい始めたんだ」

ようやく言えた、本当のこと。

「だけど、離れるのは兄さんたちじゃなくて、僕の方だった」

「……愛斗」

僕は真っ黒になつたテレビを見つめ、言つ。

「騙してて、ごめんなさい」

二人は何も言わなかつた。

「僕、一人のことは大好きで、だけど鬱陶しいと思つてた」

三人で暮らすにはちょうど良いサイズの2LDK。

「二人が原因で、彼女と長続きしないって言い訳にしてた」

違った。

「浩美に言われて、やつと気づいたよ。僕の方が兄さんたちに甘えてた、プラコンだつたんだ」

夜兄は僕を見た。

「確かに、そうだったかもしねないね」

昔からずつと一緒だつたから、何がどうなつているのかなんて分からなかつた。うやむやになつていた。

朝兄が拳でテープルを叩く。

「離れなきやいけないのは分かつてたさ。だけど、きつかけがなかつた」

その表情は読めなかつた。僕はただもう一度、ごめんなさいと言つた。

「ごめんなさい。僕は、本当にひどいことをした。一人を騙して、純まで騙して、最低だつた」

「それでも愛斗は俺たちの弟だよ」

「俺たちの、自慢の弟だ」

僕は一人きりでは生きていけない。

「うん……ありがとう」

朝兄の拳にそつと手を置いて、僕は夜兄を見る。

「朝兄も夜兄も、僕の自慢の兄さんだよ」

他の人には代えることの出来ない、大事な大事な兄たちだ。

「ありがとう」

夜兄がそう言つて微笑む。

朝兄は顔を上げると、僕の額にキスをした。

「お前が外で何をしようと、ずっとお前は俺たちの弟だからな」と、僕を見る。心からの言葉に、僕の心が震えた。

涙が溢れるわけではないのに、声が震えて身体の芯が冷えていく。

「うん……うん。ありがとう、朝兄、夜兄」

だけど、僕にはまだ心残りがある。

「でも、また僕が男の人を好きになつたら

それでも、変わらずにしてくれるだろ？

夜兄が優しく頷いた。

「それで良いよ。愛斗の人生なんだから、愛斗の好きなように選べば良い

「ちゃんと、理解してやれないかもしれないけど、傷つけたくはないからな

と、朝兄。

その、昔からずっと僕に注がれてきた愛情が、嬉しくて。

「……うん

嬉しくて、泣いた。

飽きたるまでそばに

クリスマスライブの三日前、僕は久しぶりに純と会った。外だつた。

「……愛斗、今、何て？」

目を丸くする純へ、僕は言う。

「別れよう」

ジングルベルが鳴り響く夜の街で、僕は純を抱き寄せた。

「純の言うとおり、僕は全然本気じゃなかつた。だけど好きだつた」

「……」

「矛盾してゐるけど、僕は確かに純を愛してた。ただ本気じゃなかつただけなんだ」

純が僕の背に腕を回して、頷く。

「そうか、やつと分かつてくれたのか」

「……うん」

人目を気にせず、僕たちは抱きしめあう。

「僕は流されてた。優しすぎた。だけどね、純」

「……何」

「純のおかげで、どっちもいけるつて分かつたんだ。恋愛対象は女の子だけじゃないつて」

「……うん」

僕は今度こそ、純にも本当の気持ちを伝える。

「こんな僕で良かつたら、もう一度愛してくれないかな？」

純が丸い目で僕を見上げた。

「愛斗……？」

「純のこととは、まだ納得できないんだ。依存とか、縋り付くなんてことは言わないので、今の僕を愛して欲しい」

「……」

純は僕から離れると、一歩後ろへ下がった。

「今度は、本気？」

「うん。本気っていうか、純のいない生活を考えるのが辛いんだ。飽きるまでそばにいたい

「……今までは？」

「ただ純の想いに応えるだけで、僕は僕自身の気持ちと向き合つてなかつた。僕はいつの間にか、純を好きになつていた」

純が唇を噛む。

「愛斗、意地悪になつたな」

「そう？」

「だつて、別れるつて言つたのに……愛して、なんて僕はいつものように微笑む。

「だつて、一度嫌いになつてもらわなくちゃ、僕は純としつかり向き合えないよ。僕のこと好きな純とは、付き合えない」

「……意地悪

俯く純へ、僕は尋ねる。

「それで、答えは？」

純はしばらくなかった。

鳴り響くジングルベルを聞いていた。クリスマスに浮かれる恋人たちを、遠目に眺めた。今年のクリスマスは、僕の人生にとってとても大事なものになる。僕は確信した。

「良いに決まってるだろ……！」

と、純が顔を上げて僕の胸に飛び込んでくる。その華奢な身体を抱きしめて、言う。

「ありがとう、純。……愛してる」

「オレも、愛してる」

まもなく純は嗚咽を漏らしあじめ、僕はちゅうと困惑った。

「え、もしかして泣いてる？」

「つ、な、泣いてなんか、ねえよ！」

と、顔を上げた純の両目は潤んでいて、すぐに涙を零れさせる。

「……泣いてるじゃん」

僕はそっと涙を指で拭うと、キスした。堂々と、キスをした。
気が済むまで、キスした。

恋愛対象は女の子だけじゃない。何故なら目の前にいる彼は可愛くて、時折かっこよくて、とても頼りになるからだ。
僕の大切な、大切な彼氏だ。

新しい世界へと

「あれ、そんな指輪してたつけ？」

ライブハウスへ向かう途中、小野さんの助手席へ座った僕は左手を見せて言つ。

「婚約指輪です」

後ろの三人が話をやめて僕を見る。

「婚約つて、誰とやねん」

「つていうか、それペア？」

「お前、あいつと別れるつて」

後ろを振り返つた僕は笑う。

「別れたよ。だけど婚約したんだ」

小野さんが前を見たまま言つ。

「説明してくれなきや分からぬねえ」

「そいやそいや！ 説明せえ」

「え、愛斗、相手はー？」

「だから、婚約つて普通

騒ぐ友一とキオだつたが、事情を知る浩美は戸惑うばかりだ。

「僕は踏み外した道を信じ込んで歩いてた。けど、それが間違いだつて気づいて、道を変えた

「は？」

「愛斗さーん、戻つてきてえ」

遠回しに僕らしくないと文句する一人。

「そうしたら、僕は確かに少しでも、彼を愛してたつて気づいたんですね」

「……愛斗、お前

「今までの全てを無かつたことにして、今度は僕の方から告白した。

ただそれだけ」

浩美が頭を抱える。

「その内に、一緒に住む約束もあるんですよ。良いでしょ？」

「僕は小野さんへ言つ。

「良いなあ。けどマナト、本番は外してね」

「分かつてまーす」

左手の薬指にはめた指輪を、じっと眺める。後ろで友一が頭を整理している浩美へ声をかけた。

「どうした、浩美。お前、死ぬんか？」

「いや……むしろお前を殺したい」

「何でや！ 僕何もしてへんし」

友一のおかげで車内はまた賑やかになり、僕は笑う。

ライブハウスは前回と同じくらいの大きさだった。一階席も使用するとキャパシティはさらに増えるという。

リハーサルのために舞台へ上ると、今はまだ誰もいない両側が輝かしく見えた。時間が来れば、ここは人で埋め尽くされる。

「キオ、それ……」

ドラムセットを前にして、僕は前に立つキオに思わず声をかけてしまう。

「え？ ああ、これのこと？」

「うん」

キオは赤くて先に白い飾りのついた三角の帽子をかぶっていた。

「私物です」

と、きらりと田を輝かせる。話を聞くと、前回の打ち合わせで決めたことらしかった。

浩美と友一の準備が整い、キオがマイクに向かって叫ぶ。

「メリークリスマース！」

僕がドラムを叩き出せば、浩美も一緒になつてリズムを生み出す。友一のギターがこの季節に似合う高音をかき鳴らす。

僕らが歌うのは軽快なリズムのパンクロック。聞いてくれる人た

ちがみんな笑顔になつてくれるよう、祈りを込めて演奏をする。

キオの歌声に僕らは思いを馳せ、少しでも何かが届くようにと願

う。

軽快なリズムを叩く僕は、きつとこれからもこの場所で生きてい
く。

忘れられない人を想いながら、忘れられない思いを胸に抱いて、
新しい世界へと走り出す。

end

新しい世界へと（後書き）

本編はこれで終わりです。
今までありがとうございました。

後日談・ずっと気になっていた」と

ずっと気になっていたことがある。それは、互いに。

「小野さんって、実はゲイですよね」

「ひろ美くん？ いきなり君は何を言ひ出すのかな」

苦笑する小野マネージャー。

浩美は溜め息をつくと、もつと一度言ひた。

「目が怪しいですもん」

「……あのねえ」

とりあえず場所が悪いので、人気のない隅っこへ寄る。

「仕方ないから告白するけど、僕はバイだよ

と、小野は言つた。

「やつぱり」

浩美の言い方にはどことなく棘があり、小野をいらっしゃせぬ。

「でも今は嫁がいるし、来年には子供だって生まれる」

「そうですか」

「だから、君たちには頑張つてもらわなくちゃならないんだよ」

「……俺」

と、浩美が声を出し、小野は彼の方を見た。

「失恋しました」

相手は言わなくても分かつていた。だからこそ、小野は言つた。

「可哀想に」

「……最初から、選択を誤つていた気がします」

「そつなの？」

「……あの時は、どっちも本気になるなんて思わなかつた」

浩美が溜め息をつき、両のまぶたを押さえる。

「自業自得つて奴です」

「うん……じゃあ仕方ないね」

「……仕方ないなんて言わないで下さい。マジで泣きそうなんだか
ら」

そのまま顔を上げない浩美を見て、小野は言つ。

「もう泣いてるじゃないか

「……つ」

浩美が涙をこぼすたびに、小野は昔のことを思い出す。

「ただ、バイつて言つても、僕の場合は何もしてないんだよね」

「……」

「ただ男の先輩にあこがれてた。本氣で抱かれたいと思つてた」

「……」

「それだけで、男性経験はないよ。そこ、勘違いしないようにね」
浩美は構うことなく、ぽつりと話し始める。

「俺……あいつが幸せなら、それで良いと思つてた。けど……今になつて、自分を押し殺してただけだつて」

「気づいたんだ？」

「……そばにいるだけで満足なはずなのに、抑えられない」「切ないね。僕もあの頃は悩んだし、苦しかった」

小野は言いながら、彼の肩に腕を回した。ぽんぽんと叩いて、慰めてやる。

「でもさ、今まで我慢できたんだから大丈夫だよ。彼のそばに居続けられる」

「……おかしく、なりそうだ。最初から全部諦めたふりして、笑つてた。……俺は、馬鹿だ」

「忘れることが出来ないなら、せめて今は関係を続けるしかないよ

「……つ、分かつてる」

「それにほら、君たちは相性ぴったりじゃないか。彼と一緒にリズムを刻めるのは君だけだよ」

浩美の肩が揺れた。少しだけ顔を上げて問つ。

「……知つて？」

「見てれば分かるよ。君は彼にとつては頼れる兄だし、親友だし、

仲間で、ある意味特別な関係にいる」

浩美は唇を噛んだ。両の拳を握りしめ、感情を抑える。

「もしかすると、他の二人も知ってるんじゃないかな？」一人とも、

空氣読める子だからねえ」

「……」

「ただ、本人だけが知らないって言うか。彼、結構鈍感だもんなあ

「……どうしたら、良いですか」

「そうだなあ、とりあえず彼の幸せを祝福してあげようよ

と、小野はにっこり微笑む。

「望んだことが叶う訳じやないだらうけど、別の誰かを好きになれるように努力しよう」

「……はい」

「僕だって、忘れるまで苦労したよ。まあ、ひろ美の場合は……も
つと苦労するかもね」

震える肩を強く抱いて、小野は言つ。

「苦しいだらうけど、今はもっと多くの人たちに『ラティ』の歌を
届けよう」

「……っ、……はい」

浩美は口をぎゅっと閉じ、溢れる涙を指で拭つた。

叶わなかつた。けれども小野は今を生きている。

叶わなかつた。けれども浩美は、これからも彼のそばで自分の音
を響かせる。

後日談・少し早い春の日

純の部屋は狭いけど、兄さんたちのおかげですつきりしていた。
「二人で暮らすんだつたら、これからはこまめに掃除しないとダメだよ」

と、夜兄は純へ言う。

「あ、はい。すみませんでした」

「愛斗も純くんに任せるとじやなくて、ちやんと自分で出来ることはやるんだよ？」

「う、うん。分かつてるよ」

「あ、あとベッドだけど」

と、夜兄がそれに近寄る。

「汚れたらすぐにシーツは取り替える」と。あとあんまり激しくしないようにね。ベッドなんて高いんだから、気をつけてよ」
何も言ひ返せなかつた。言ひとしても、いつも床でやつてるから平気、くらいで。……実際に言つたら、いろんな意味でどん引きされそうである。

「他に『ミ』はないか？」

戻ってきた朝兄がずかずかと部屋に入つてくる。

「ああ、朝日。この子たちに何か言ひことはない？」

「言ひ」と？

朝兄は室内を見渡すと、言つた。

「あー、来月あたりに俺もこの近くに引っ越すから」

僕と純は顔を見合わせ、夜兄は言ひ。

「するい！ 何で俺に黙つてそんなこと

「違うんだよ。彼女がこつちで良い部屋見つけたが、まだ確定はしてないから安心しろ」

「そう言ひながら、決めちゃうんでしょ？ 見損なつたよ、朝日」

「はあ？だから俺じゃねえって言つてゐるだろ！ だつたら月夜も
引っ越せばいいじゃねえか！」

「そんなこと……弟の幸せを邪魔するのは、気が引けるからい
いよ」

と、保護者のような目で僕らを見る。

「俺は朝日よりも大人だから、二ヶ月に一度会いに来るだけで我慢
するよ」

「あ、あの、できれば半年に一度……」

僕が言つと、落ち着いた朝兄が言つ。

「さうだ、半年に一度で良いじゃないか。俺は彼女の理解は得てる
し、たまに食事に招待してやるけどな」

と、僕らに向かつてこり微笑む。

「あー！ やっぱり越してくる気満々じやん！ 我慢してよ、朝日
！」

「何だよ、近所なんだから良いだろ？」

「……っ、せめて職場が近ければ良いのに」

と、悔しがる夜兄。ここからだと兄さんの通り小学校まで電車で
一時間はかかる。残念ながら、どうしようもなかつた。

「なあ、愛斗」

「ん、どうしたの？」

僕の袖を引っ張る純へ顔を向ける。

「やつぱりお前の兄貴、ブラコンだな」

「はは、本当にね」

僕は笑うしかなかつた。兄さんたちと別れるのは名残惜しいが、
純がいるなら構わない。

「愛斗、何かあつたら朝日じゃなくて俺に連絡するんだよ
と、夜兄。

「俺、実家にいるから母さんにもつながるし、すぐ便利だよ
どつやら夜兄は僕とのつながりをどうしても持ちたいらしい。

「何言つてゐるんだ、俺の方が近くで便利だぞ」

「ダメだよ、朝日は彼女を大切にしてあげなきゃ。その点、俺は相手がないから身軽だよ」
必死すぎる。

「あ、ああ、うん。場合によって、相談する相手は選ぶよ」と、僕は返す。

「選ばなくて良いよ。俺の方が良いつて」「俺ならすぐに助けてやれるから俺にしろ」「えつと……あの、じゃあ、二人に相談するから兄さんたちが睨み合つ。

「……仕方がないね、百歩譲って許そう」「だが本当に信頼できるのは俺だつてこと、忘れるなよ」
僕はただ苦笑する。見ると、純も苦笑していた。
これからどうなるかは分からなければ、何か楽しいことが待つ
ているような気がした。

少し早い春の日だった。

設定 +

<人物設定>

鈴木愛斗

21歳176?

鈴木朝日

26歳178?

鈴木月夜

26歳178?

高野純

23歳174?

山田浩美

22歳181?

キオ／佐藤清男

21歳162?

前田友一

21歳170?

小野マネージャー

28歳175?

<ブログタイトル>

キオ：カラフル わたあめ

ゆーいち・ポジティヴパンкинг

ひろ美：ヨリドリ美ドリ

マナト・愛色モノクローム

＜ファンによるファンの為の非公式カッティングランкинг＞

- | | |
|---|------------|
| 1 | マナト × キオ |
| 2 | キオ × マナト |
| 3 | マナト × ゆーいち |
| 4 | ひろ美 × キオ |
| 5 | マナト × ひろ美 |

マナトには実際に彼氏がいるんだから妄想するのは良くない、と
いうファンもいるようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7805m/>

僕と彼氏と兄二人

2011年2月12日17時40分発行